

中国語新聞の紙面編集の史的考察(上)

馬 挺*

前書き——中国語新聞の史的区切りについて

第一節 中国語新聞の萌芽期の紙面(？)十九世紀初期)

- 一、中国古代新聞の紙面について——『題奏事件』を中心に
- 二、『京報』について
- 三、萌芽期の新聞の紙面構成についてのまとめ

第二節 中国語新聞の成立期の紙面(一八一五年～一八七四年)

- 一、最初の近代型中国語新聞『察世俗每月統記傳』(一八一五～一八二一年)
- 二、後継紙とその他
- 三、近代型新聞の紙面構成を採用した最初の新聞紙

四、中国語新聞の成立期における紙面構成についてのまとめ

(以上「上」)

第三節 中国語新聞の発展期の紙面(一八七〇年代後半～一九五〇年代前半)

——『申報』を中心としての検証

- 一、『申報』の概要
- 二、『申報』の編集方針と紙面構成
- 三、その他の新聞の紙面と発展期についてのまとめ

第四節 中国語新聞の充実期の紙面(一九五六年以降)

——『人民日報』を例として

- 一、『人民日報』の概略
 - 二、一九五六年の紙面刷新について
 - 三、文化大革命の期間
 - 四、『人民日報』の紙面についてのまとめ
- 後書き——中国語新聞の紙面構成における二大源流の融合について

前書き——中国語新聞の史的区切りについて

一つ予備的研究として、拙稿の『中国の新聞紙面研究』についての考察⁽¹⁾を上、下に分けて、本紀要の第十(二〇〇二年)、十一号(二〇〇三年)に載せていただき、研究者らの最近までの中国新聞紙における紙面に関する研究成果を検証してきた。それを基礎にして、本稿は史的流れの視点から、中国語新聞の紙面の変遷を考察していきたい。

新聞紙面の変遷について史的考察を行う場合、その発展の流れを区切る必要がある。中国の新聞史における時期区分についての考えはすでにいくつかあるが、その多くは大体社会発展の時期によって分けられている。しかし、紙面についての研究は新聞と社会的発展との関係ばかりではなく、新聞それ自体の内在的要素をかなり重視しなければならぬと思われる。王鳳超氏は「新聞の歴史のマクロ的進展」を中国新聞史の時期の区分について一つの基準として提示した⁽²⁾。

上述の『中国の新聞紙面研究』についての考察(上)で触れたように、卓南生氏の「成立史」という考えをヒントに、本稿では中国語新聞の歴史を次のような四つの時期に区分することを試みたい。すなわち、一八五〇年〜一八七四年の「成立期」の前に、長い「萌芽期」をおき、また一八七〇年代から一九五〇年代までを「成長期」、その後を、「充実期」と名付ける。本稿は、萌芽期においては、日本国立国会図書館などで発見された清の中期に民間発行の日刊紙『題奏事件』によって、中国古代新聞の紙面構成を、そして成立期、すなわち中国語新聞として「冊子」型紙面から近代新聞の紙面への転換期を重点において考察を行う。

第一節 中国語新聞の萌芽期の紙面(一)十九世紀初期

中国語新聞の「萌芽期」とはいつの時期からかという問題について明確には答えられない。その理由は中国の古代新聞と言われる「邸報」がいつ出現したかについて結論がまだ出ていないからである。

一、中国古代新聞の紙面について ——『題奏事件』を中心に

「邸報」が実際に存在していたか、そして、もし存在していたとしたら、どの時代から登場したのかについては、実は中国新聞史上一大懸案となっている課題である。この懸案について論じるのは本稿の任務ではないが、紙面についての考察のためには、その経緯と筆者のこれに関する考えを述べておく必要があると思う。

「邸報」が西漢時代に存在していたかもしれないという発想は、戈公振氏が提出したものである。その根拠は歴史文献に「邸」という地方行政の駐京機関があり、消息を伝えていたと記載されていることにある⁽³⁾。しかし、証拠とするに値する記録や実物はなかった。方漢奇氏は一度「邸報」は漢代に始まるという説に沿ったが⁽⁴⁾、ついに「根拠は欠けている」と認めた⁽⁵⁾。

方漢奇は遅くとも唐代に「邸報」はあったと主張している。黄卓明氏は漢時代から「邸報」があることはあり得ないと判断し、中国の古代新聞の始まりは唐朝の「報状」、すなわち『読「開元雜報」』に記録された「報」で、また『進奏院状』は藩鎮が「報状」にもとづいて鈔した原始形態の新聞であると指摘した⁽⁶⁾。

(一) 所謂「邸報」

戈公振は「邸報始於漢唐(邸報は漢、唐に始まり)」と述べているが、実際に漢(紀元前二〇六年〜紀元二二〇年)の始めから、唐(六一八年〜九〇七年)まで、千年以上互っているもので、これは一つの推測に過ぎない。

東漢の許慎著の『説文解字』(紀元一〇〇年)によると、邸という言葉葉は、「属国舎(属国の舎なり)」であり、即ち、古代諸侯や各地方長官の駐京機関や京城にある宿舍と考えたらよい。

漢の時代に確かに「邸報」があったかどうかについて、戈氏も「漢有邸報乎(漢に邸報があったか)」という不確定のような言い方にとどまり、氏は『西漢会要』と『漢書』に記載されている間接的な例をあげて「邸報」の存在を証明しようとした。⁽⁸⁾しかし、方漢奇はこれらの例から、当時すでに邸報で朝廷の消息を伝達していたことを証明できないと述べた。⁽⁹⁾

また、黄卓明は唐代まで「邸報」に関する明確な記載が発見されていないから、漢時代に「邸報」はあるとは断定できない。⁽¹⁰⁾姚福申氏は漢代に「邸報」がまだないと証明されていると指摘している。⁽¹¹⁾

方漢奇は遅くとも唐代に「邸報」はあったと主張する。その根拠は、唐代の文献に「進奏院状報」「邸吏報」「報状」「報」「雜報」「条報」「朝報」などの言い方の記載がすでにある一方、「開元雜報」についての詳細な記録と『進奏院状』の実物があるからとする。⁽¹²⁾

「邸報」という言葉について、文章に現して最も古く記録は宋時代の文学者范仲淹(九八九〜一〇五二年)の手紙に書いてある「頃接邸報某有恩命改職増秩誠為光寵」という文とされており、その意味は、「先ほど邸報を頂戴し(或いは邸から知らされ)、皇帝の命令によって昇進されて、誠に光栄と存じる」⁽¹³⁾であると思われる。

説明したいのは、まず古典中国語は、「邸」と「報」の二つの字がつけられると、少なくとも二つの解釈がとれる。即ち、邸の報、邸による発行する文書・報告書のように名詞として理解できる一方、邸に報じられ、邸に知らされるのよう動詞としても理解できる。はっきり判断できない場合もあり、上述范仲淹の手紙の場合が二つの意味ともとれる一例である。そして、戈公振に挙げられている『全唐詩話』にある「邸報制詰闕人、中書兩進君名、不從、又請之(邸報に闕人をし中書は君の名を進むに従はず、又之制詰ふと)」⁽¹⁴⁾という文には、「邸報」が「邸が報じたところによると」と理解した方が適当であろう。また、報という字は古代において、動詞として使われた方が多く、報が新聞紙という意味を持たされたのは近代になってからと思われる。従って、古代文献に「邸報」という二字がつけられたとしても、それは古代新聞「邸報」であるとは限らない。

古典文学作品に描かれている「邸報」に関する部分を見てみよう。明の時代を背景とすると考えられている『金瓶梅詞話』によれば、明時代に「邸報」を読みたい人は、梟庁においてお金を払って写さなければならなかった。⁽¹⁵⁾こういう「邸報」は新聞と言うより、公開できる官文書といった方がふさわしいと思われる。清代の社会を背景とした『紅樓夢』に描かれている公館の机の上に「邸報」を山ほど置いているというような風景は、「邸報」がすでに発行物であると思われる。⁽¹⁶⁾

官文書に「邸報」について最初定義したのは宋代の『宋会要輯稿・刑二下』であると同様に指摘されている。それは宋光宗紹熙四年(一一九三)十月四日の大臣の進言によるもので、「国朝置進奏院於京師、而諸路州郡亦各有進奏吏、凡朝廷已行之命令、已定之差除、皆以達四方、謂之邸報。(国朝が京に進奏院を置き、各地の州郡に進奏吏が有り、凡

そ朝廷が行った命令、既に決めた命令を、各地に伝達する。これを邸報と言(17)う。」という記録である。しかしこの中の「邸報」は古代の新聞か、あるいは邸の文書か、について、まだ疑問する余地があると思う。いづれにしても、今日まで「邸報」と思われるものは存在しているが、「邸報」と書かれている実物はまだ発見されていない。

(二) 所謂「開元雜報」
「開元雜報」についての記載は主に唐代の孫可之(樵)の『経緯集』



“開元雜報” (摹制件)

図版一 「開元雜報」(偽物?)
(『中国新聞事業通史・第一巻』より)

の『読「開元雜報」』という文章にある。文章の始めには次のように記載されている。

「樵昔於襄漢間、得数十幅書、繫日条事、不立首末。其略曰『某日皇帝親耕籍田、…』(樵、昔に襄・漢の間に於いて、数十幅の書を得たり。日を繫ぎて事を条べ、首末を立てず。其の略に曰く『某日、皇帝、親しく籍田を耕し、…』)」

また終わりに、
「因取其書帛而漫志其末(因って其の書帛を取りて漫ろに其の末に志す)⁽¹⁸⁾」と説明した。⁽¹⁹⁾

なお、清の末民国初年の版本学者孫毓修の『中国彫刻源流考』に「開元雜報」の様子についてこう記載している。

「葉十三行、每行十五字、字大如錢、有邊線界欄、而無中縫、猶唐人の寫本款式、作蝴蝶裝。墨影漫漶、不甚可辨。(葉は十三行、每行十五字にして、字は大なること錢の如し。辺線・界欄あれども。而も中縫なく、なお唐人の写本の款式のごとし。蝴蝶装を作す。墨影、漫漶として、甚だしく辨ずべからず。)」

これは近年までにあった「邸報」の紙面の構成について唯一の文字の記録であるが、一部の学者はこの記録に対して疑問をもっている。例えば姚福申は、まず、『読「開元雜報」』の「開元雜報」は孫可之が勝手に作った呼び方であるし、唐人の著作に二度と見たことはなかったと指摘した。また、孫は自身が読んだという「開元雜報」を印刷物とは言わなかったことについても指摘した。さらに、孫毓修の記録では「蝴蝶装」といったが、実際に「蝴蝶装」が唐代の後の宋時代から始まった装丁形式であることによって、孫毓修の『中国彫刻源流考』に書かれた「開元雜報」は偽作と判断したのである。(図版一参考)

(三) 『進奏院状』の実物

『進奏院状』の実物はすなわち上述の拙稿『中国の新聞紙面研究についての考察(上)』で触れたパリ国立図書館と大英図書館所蔵「敦煌卷子」の二点である。大英図書館の「敦煌卷子」(第S一一五六号)が横九七センチ、幅二八・五センチの横巻状態で、正面は第一行の「進奏院状上」という文字で始められている。紙は丈夫そうな宣紙であり、文章は右から左への縦書き、内容未完、残されたのは合わせて六十行で、字が一杯の行は大体一行二十字ぐらいである。また裏には『大漢三年季布罵陣詞』という民間の文学作品が六十四行で書かれている。

方漢奇が一九八三年一月の『新聞学論集』第五輯で大英図書館の所蔵分を分析する際もとづいたのは手書きの写しで、原物の一部の写真が見られるのは、王鳳越の『中国的報刊』である(図版は同上拙稿参照)。後に方漢奇の『中国新聞事業通史・第一巻』で二つの『進奏院状』を取り上げて詳細に検証を加えた。⁽²¹⁾

内容についての分析によって、学者らは大体『進奏院状』を唐代の新聞と納得しているようであるが、しかし、紙面構成の考察の角度からみると、『進奏院状』の紙面は手書きで、普通の手紙や報告書など当時の文章の書き方と異なっていないので、『進奏院状』の紙面はその時代の「邸報」の紙面構成の状態とは言いがたいと思われる。

(四) 『万歴邸鈔』『崇禎年章奏残冊』

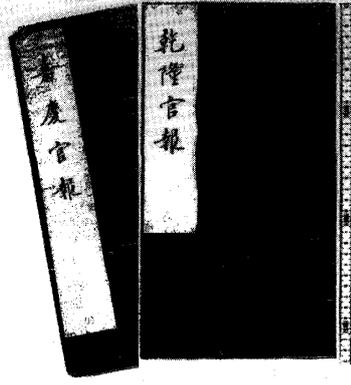
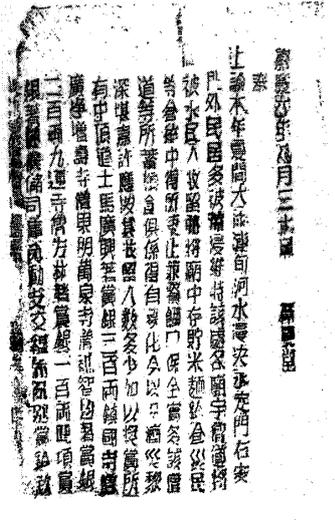
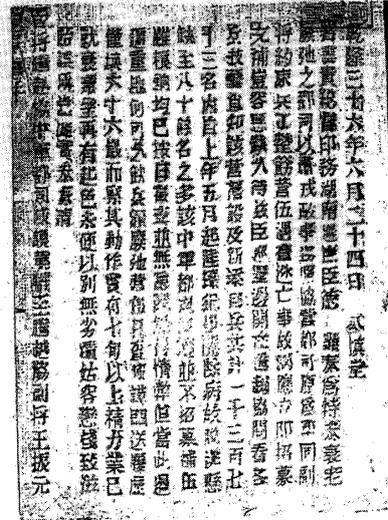
唐代に続いて、宋・元時代に「邸報」はすでにかなり普及していたが、「邸報」の実物についての記述はまだ見たことがない。そして、明朝になると、著名な『万歴邸鈔』、すなわち明朝万歴年間の「邸報」の抄録

があり、それは「邸報」の内容についての研究にとって非常に重要な膨大な資料庫である。また台湾の中央研究院歴史語言研究所に保存されている明朝の内閣大庫の遺書の中に、赤罽紙に手書きされた十二冊の装丁済みの『崇禎年章奏残冊』と仮に名付けられた写本があり、すでに一般公開されている。それには一面に八行十二字詰めと九行十三字詰め二類があり、内容は「朝儀」「任免」など宮廷での重要な事項についての簡単な報告で、軍事情勢や勤務状態まで含まれている。台湾の新聞史研究者蘇同炳氏は、この写本こそ明朝の邸報の実物を一括保存したものと発表したのである。⁽²²⁾これは『万歴邸鈔』と同じように、「邸報」の内容についての研究に意義があるが、「邸報」そのものではないので、紙面構成についての考察にとっては、あまり意味があるとは思われない。

(五) 『題奏事件』の発見と概観

尹韻公氏の分析⁽²³⁾によって明朝の末期に「邸報」はすでに印刷されていたと推定される。しかし、印刷された「邸報」の実物はいままでも一つも発見されていない。その原因の一つは、「邸報」というものが、一定の歴史時期において、いくつかの性質が似ている発行物の総称あるいは別称・俗称であったことにある。そのため、歴史上本当に「邸報」という文字を冠した発行物は本来存在していなかったかもしれない。「邸報」に属するものが目の前にあっても、それこそが「邸報」であると分からないことも十分考えられる。このような考えは、すでに姚福申によって指摘されており、方漢奇もまたこれに同調している。⁽²⁴⁾

しかし、筆者は「邸報」の紙面構造を明らかにすることに絶望していたところ、偶然にもこれこそ印刷された「邸報」ではないかと思われる資料を発見した。実は、一九九一年ごろ、筆者が東京の国会図書館で後



図版 - 二 「題奏事件」 右：乾隆 36 年 6 月 24 日，左：嘉慶 6 年 8 月 3 日，
左上：冊子の表紙（日本国立国会図書館所蔵）

に論じられる『申報』に関する資料を

求めていたとき、目録に「邸報」と記して、清朝の『乾隆官報』と『嘉慶官報』と名付けられた文献を調べる事ができた。

実際にそれらの資料を調べて、その内容は「官報」ではなく、「公慎堂」から刊行された『題奏事件』という清朝の日記紙と判った。それを糸口として、東京大学東洋文化研究所大木文庫も『題奏事件』を所蔵しており、また、中国の北京図書館（国家図書館）と中国の個人蔵書家である田濤氏もそれぞれ所蔵しているこ

とが判明した。

一九九三年、筆者は『中国の最古の印刷新聞「題奏事件」について』と題して、『題奏事件』は今まで発見された最も古い日刊新聞紙のことについて検証していた。⁽²⁵⁾ その中から、本稿と関連のある部分を次のように要約しておきたい。（図版一参照）

その一、時期と所蔵品日数：上述の四箇所の所蔵を合わせて、清乾隆三十六年六月二十四日（西暦一七七一一年八月四日）⁽²⁶⁾ から、嘉慶六年十月六日（西暦一八〇一年十一月十一日）まで、三十年あまりにわたった九十三日分がある。一日の分は大体三葉六頁で、日付は六日から八日で連続しているものが多い。

その二、名称と発行先：版口（折り目）に印刷されている『題奏事件』の文字は、中国の古典書物の慣例によって、版口の文字はその本の題名か章節の題かどちらかであるが、『題奏事件』はこの発行物の名称と断定できよう。発行先は本屋か民間刻坊（印刷屋）と見られる「公慎堂」である。

その三、用紙・印刷と装丁：質の悪い竹紙（ちくし）に木か粘土の活字（宋体・日本の明朝体と類似）を使って、墨で印刷されたと見られる。原紙の大きさは時期によって少し異なっているが、だいたい半葉二十センチ×二六・五センチである。紙に残されている穴から、元々の装丁は「紙捻（紙繕り）装」であったと判断できる。

その四、紙面構成：上述の「その一」のように、版口の上方に「題奏事件」と、また下方に葉数の「一」「二」「三」が印刷されている。中身は縦書きで第一行は「乾隆三十六年六月二十四日 公慎堂」のようになり（日付は変わる）、半葉に十四行で一行に二十二字（台頭を含む）であり、糸欄（行線）がないが、傍線を加えたケースがある。嘉慶年間

の分になると十二行十九字に変わった。

その五、内容：

○題本：主として各部や地方の官吏の報告。

○奏摺：奏摺

主として官吏の報告。内容は官吏の弾劾、物資の調達、皇帝に対する謝恩謝罪などに関するもので、地方の世論についての報告もある。

○（奉）上諭（諭旨を奉ずる）：

皇帝の意思にもとづいて軍機処や内閣が書いた指示である。その内容は官吏の昇級降格、お金や食糧の徴収、大臣の死亡などがある。

○奉旨：官吏の異動や欠員補充の命令など。

○文選単・武選単：文武官員に登用されたり昇進されたりした人のリスト。

○諭旨（諭旨）：皇帝の祭陵（先祖のお墓の代参）などの行事についての命令。

○朱批：皇帝が奏章に赤筆を用いて書いた親筆の文を指し、独立した項目ではなく、大体一件の奏章の中か最後に加えてある。よくあるのは「知道了（分かった）」「依議（宜しい）」「該部議奏（該部の部に議論させて報告せよ）」「該部知道（該部の部に知らせよ）」などで、もっと長い文もあった。印刷上カラーを入れるのは不可能だったので、「朱批該部議奏」と書き加えることによって、皇帝の親筆であったことが示されている。

その六、新聞としての性格

まず、『題奏事件』の内容は皇帝や朝廷、官吏の言動を中心としていた。しかし、封建的統治を強いられていた中国の清の社会において、これらの内容を行政機関と別に民間で報道したこと自体は、当時の新聞が

できる作為の限界と考えられる。一方、上述の紹介と次の『京報』についての検証からも分かるように、日本の瓦版や他の国の初期新聞と異なって、これらの内容しか報道できないのは中国萌芽期新聞の特徴ともいえる。

そして、『題奏事件』は民間発行と活字印刷によって、不特定の読者を対象とした新聞類発行物と判断できよう。上述の「文選単・武選単」の掲載されている官吏のポストは、それほど高いものではないことから、高官だけではなく、より低い階層の人たちも対象にしていたことが伺える。しかし、発行元の「公慎堂」は本屋なら、一種のサービスとして店頭で無料配布していた可能性がある。

また、『題奏事件』は少なくとも三十年に亘って発行しつづけていた日刊紙であり、当時の社会状況からみて、一定の速報性と正確性が保たれていた。

なお、既に高度な印刷レベルを有する清の時代に、『題奏事件』は用紙、印刷、装丁の粗末さから、最初から保存を目的としないで、いわば「読み捨て」のための新聞類発行物であったことももう一つ証拠ともいえよう。

（六）『題奏事件』は「邸報」であるかについての検証

『題奏事件』を概観したところ、歴史の文献に述べられたいわゆる「邸報」の内容と相似している。現存の『題奏事件』より百五十年あまり以前の「邸報」を記録した『万歴邸抄』と比べれば、報告された内容と非常に似ている。尹韻公の分析によると、『万歴邸抄』の報道内容と範囲は、皇帝の活動、皇室の動態、皇帝の諭旨、官吏の昇降、そして経済、軍事、社会などである。²⁷⁾『題奏事件』は自身の名称と葉数に制限さ

れていたもので、論旨と奏章を主にしていたが、『万歴邸鈔』のような内容を多かれ少なかれ、触れたものがある。

そして、「邸報」の活字印刷は明の崇禎十一年（一六三八年）から始まったという記録がある。⁽²⁸⁾つまり、一七七〇年代に活字で印刷された「邸報」があったということは決しておかしくないと思われる。

また、発見された『題奏事件』は「邸報」か『京報』かについて、『京報』は明の末期にすでに現れたと述べる学者がいるが、⁽²⁹⁾確かな記録は戈公振によって清初の北京の榮祿堂が『縉紳録』と『京報』を発売していたとするものである。⁽³⁰⁾なお、「邸報」と「京報」という二つの言葉は、明末の天啓（一六二一年から）年間から二、三百年にわたって共存していたが、⁽³¹⁾清の道光十年（一八三〇）以降の文献の中に、「邸報」はほとんど見られなくなる。⁽³²⁾現存の『題奏事件』の年代は上述の期間の半ばにある。『題奏事件』は「邸報」か『京報』か、年代だけで答はえられないようである。

「邸報」の概念はまだあいまいで、原物はほとんどないので、「邸報」の角度から立証しにくい。だが中国の古代新聞と一般的に認められている『京報』の原物は大量に残されていて、学者たちの意見も大体一致している。まず、『京報』の角度から検証しよう。

『京報』についての学者たちの論述を一応まとめよう。『京報』は民間の報房によって、定期的（日刊の方が多い）発行され、北京を中心として発売し、一日一冊、大多数の『京報』の大きさは六寸×三寸の書籍状小冊子、一冊は五、六から十余ページである。黄色の表紙がつけられて、赤い「京報」という楷字体が書かれている。その下に発行の報房（例えば「集文報房」）の名称があるのは『京報』の特徴である。その内容は宮廷の動向、官吏の昇降、奏折朱批と法律などの文書があり、

わずかな社会ニュースも含まれている。

『題奏事件』と『京報』とを比較すると、共通点も多いが、いくつかの重要な相違点もあった。

まず、『題奏事件』ははっきりしている名称がある一方、『京報』のような表紙はつけていないし、版口に「京報」という文字もない。『中国的報刊』に掲載された光緒二十一年七月一日の『京報』の写真的版口のところには「光緒二十一年京報」と書かれている。また冊子の大きさも一般に見られる『京報』の本物とは異なっている。

なお、日本国立国会図書館と東京大学所蔵の『題奏事件』の現状は線装（和綴じ）冊子には「乾隆官報」と「嘉慶官報」と題簽（書名を記して表紙に貼る紙）に書かれているが、『題奏事件』の収集者が冊子にまとめた際記したと思われるが、何の根拠でこのように書いたのか、不明である。国会図書館の目録にこれを「邸報」としてあるが、その経緯も不明である。また、田濤は自分の所蔵と東京大学の所蔵を『乾隆朝公慎堂題奏事件』と名付けてある。なお、方漢奇はこれが清時代の民間「報房（新聞発行所）」の発行物「白報本」ではないかと推測している。⁽³³⁾

以上の検証によって、『題奏事件』は「邸報」か『京報』かについて判断を下すのはまだ早いようであるが、「邸報」は政府の行政機関である「邸」か、あるいはそれに準じる機関が発行したものと意味なら、『題奏事件』ははっきりした民間発行物であるので、「邸報」とはいい難い。しかし、中国古代新聞の総称もしくは俗称としての「邸報」なら、『題奏事件』はそれに属するといえよう。一方、『京報』ははっきりした形態があるから、『題奏事件』は『京報』に並行して発行したものかもしれないが、『京報』であるとするのは適切ではないかと思われる。したがって『題奏事件』を中国古代新聞の一種として、そのまま『題奏事

件』と呼んだ方が適當でないかとあえて提案する。

(七) 『題奏事件』にもとづく古代新聞の紙面構成についての考察

上述によって、「開元雜報」は印刷物であるという説はすでに否定されておき、敦煌卷子の『進奏院狀』は手書きで、紙面についての研究にはあまり価値がない。

少なくとも、原物の『題奏事件』の掘り出しによって、萌芽期の中国新聞紙の紙面をよりはっきり究明することができる。

まず、『題奏事件』の紙面構成を次のようにまとめよう。

その一、一日三枚六葉で、たまに半枚の増葉があり、無表紙で、紙捻で右側に装丁する。一八〇〇年代になると、二枚あるいは一枚に減らしたケースもあった。半葉の大きさはだいたい二十×二十八センチで、一八〇〇年代になると、十七×二十四センチである。

その二、右から縦書き、一葉に十四行、一行は二十二字（台頭含む）で、一八〇〇年代になると、十二行十八字に変わった。行線なしで、傍線を加えたケースがある。

その三、木活字で墨印刷され、字体と印刷とも粗末で、よく判読できない字がちらほらあり、埋木の跡が見える。紙面全体の行が彎曲した頁もある。

その四、毎日分の第一行に年号と日付と発行者の名称が書かれている。また、版口には発行物の名称と葉数とがあるが、増葉には版口はない。

そして、指摘したいのは、『題奏事件』に「紙面」という存在がある。紙面という概念は、一定の限られている枠としての空間があることによって成立する。空間が無制限で延ばせるならば、入れたい内容を入れ放題で、紙面の容量によってニュース材料への取捨など編集上の手段は不

要であるので、編集論における紙面構成の意義がない。現代新聞にとって、一面の紙面の面積や一日分の何ページの紙面はいわゆる紙面の空間上の制約である。

また、編集手法の端倪も伺える。

萌芽期にある『題奏事件』は紙面における制約が厳しかった。掲載する内容は皇帝などの言動なので、添削を加えるわけにはいかなかった。しかし、一日三枚六葉一冊で、ほとんど例外はなかったし、また毎日の紙面に余白もあまりなかった。そこで、長編の場合、連載の編集手法が使われていた。前日の文末に小さい字の「此稿未完」をいれて、次の日に終わりまで載せている。極めて異例なことではあったが、増葉の日もあり、やむを得ず版口が抜けたケースもあった。

興味があるのは、一つ原稿を二回掲載する例である。ある死去した大臣をめぐる皇帝と大臣たちの応酬の連続報道で、これに関する皇帝の「上諭」が二回掲載されていた。これは事件の道筋を分かりやすくするための読者への配慮と考えられる。そして、先日一葉目にある「上諭」の部分が二回目掲載する際、そのまま二葉目に移して死去した大臣の遺書の後ろに載せられていた。活字を繰り返して使用しなければならぬ印刷屋にとって、組立て済みの「上諭」部分の版をわざわざ残して再利用することは、事件の発展を先読みして、植字の手間を省く意図的な作為であるかと思われる。さらに、「尊上」の觀念から、一貫として皇帝の言動を真っ先に掲載する慣例を打破して、再掲載する皇帝の「上諭」を敢えて死去した大臣の遺書の後ろに載せることは、ニュース価値についての考えはすでに萌芽しつつあったと認められようかと認識している³⁴。

これらから、当時の物質的条件と社会・政治環境の下で編集者の新聞紙編集業務上、極めて初歩的な考慮であったと伺うことができるが、また当時、編集者の精一杯の腕の振いどころであったと考えられる。このようにしてできあがった『題奏事件』の紙面が、筆者の調査した限りでは、これまで発見された最も古い中国古代の新聞紙面の例として取り上げられると思う。

二、『京報』について

上述で、『京報』について多少触れたが、ここで改めてまとめておこう。

(一)『京報』の概略

ほとんどの中国新聞史学者は、『京報』は明末にすでに始まったことを認めている。その根拠とするところは清代歴史学者の俞正燮の『癸巳存稿・卷十四・書「芦城平話」後』の記載である。その主な文句は「……先に王氏に於いて明の時の不全なる京報を見るに、「天啓四年四月、傳摺、内閣中書汪文言に参ず。……」十月、本紀に、「丙申、中書舍人呉懷賢に逮び、鎮撫の司獄に下し、杖して之を殺す」と有れども、京報に見えず。……」先於王氏見明時不全京報。天啓四年（一六二四年）四月、傳捷参内閣中書汪文言……十月、《本紀》有丙申逮中書舍人呉懷賢下鎮撫司獄、杖殺之、不見京報。……」⁽³⁵⁾である。

しかし、明朝の『京報』についての記載は『癸巳存稿』にしきみられず、それより早い時期の記載も報告されていないし、実物もまだ発見さ

れていない。⁽³⁶⁾

明朝に代わって中国を統治したのは満民族の清朝であり、清の支配者は明の「邸報」の伝統的な制度を基本的に継承したが、その発布の総機関を皇帝の事務機関「軍機処」に所属させ、発表内容を決める権力をより中央に集中させた。一方、「邸報」の内容のうち、許可された部分内容を写して刊行された『京報』に対して、黙認態度を取っていたようである。

明末からはじまった『京報』が民間新聞とは言え、「邸報」と一定期間共存した一種の政府の文書を主に掲載する民営の新聞紙であった。『京報』がいつ消失したのかについては、はっきりわからないが、遅くとも、民国元年（一九一二年）のとき、『京報』はまだあったといわれる。

(二)『京報』の特徴

『京報』というのは、「邸報」と違って、確かに存在した発行物の名称であるが、一つの新聞のタイトルではなく、いくつかの新聞が皆『京報』と名付けられ、ただ発行機関（報房）の名称を異にしていただけであった。なぜ『京報』と名付けられたかといえば、首都である北京で発行されたからである。また、中国語で「京」という字は「首都」という意味も持っているので、「京報」という言葉は「首都の情報」と理解できよう。

『京報』の特徴については次のようにまとめることができる。その一、『京報』は専門の編集・印刷及び発行を行う独立した機関である「報房」があり、活字で印刷され、毎日発行されていた。

『京報』の報房はそれぞれ名称をもっていた。清末における有名な報房は「聚興」「聚隆」「集文」「合成」「杜記」など十一軒があったとい

それらの報房はほとんど北京の前門南街の西側にあった。従業員は最盛時には三百人あまりもあり、情報採し、文書写し、編集、印刷、配達といった報房のすべての仕事を担当した。主な情報源は内閣と各省の駐京の塘務事務所で、許された論旨と奏折を写してきた。発行については京城内が報房の人員が配達し、地方へは人を雇って配達させた。

黄卓明は北京の報房の『京報』の編集、印刷と発行の状況について調査したことがある。それによると、清朝の内閣は東華門に「抄写房」と言われる機構を設立し、毎日正午、報房は要員を派遣してその日の政府の発表文書を写しに行く。写したものは、「宮門鈔」といわれる朝廷の政事動向についての報道と論旨を全部掲載する以外は、奏折の分量が多いので、選択しなければならぬ。発行時刻の確保のため、「宮門鈔」を手に入れたらすぐ活字版を作って一頁に印刷して、表紙なしで、『宮門鈔』と名付け、夜にはすでに発行する。これは後の夕刊と相似している。完全な『京報』には「宮門鈔」「論旨」及び「奏折」の三部分が含まれる。奏折を対折してダブル頁にし、単頁の「宮門鈔」と「論旨」と一緒にして装丁される。また、奏折の字数が多いため、活字版にするのに時間がかかって、夜間にならないと完成できないので、翌日の朝に発行される。これは後の朝刊と似ている。つまり、報房は『京報』を「夕刊」と「朝刊」の二種類に分けて編集し、また「朝刊」は前日の「夕刊」の内容を含んでいた。

『京報』の印刷について、戈公振の『中国報学史』は「木の活字で植字して印刷する」、また「泥版(石膏のようなもの)もあった」といい、これは「豆腐干版(豆腐干というの)は中国の豆腐類の一種で、普通の豆腐より堅くて水分が少ない——筆者註」といわれたと述べている。

関係者の話によると、当時粘土の活字を使ったことがあることも確か

められている。つまり、粘土で活字を作って、煉瓦のように焼き上げてから、字典の部首にもとづいて分けておいて、使うときに拾って使い終わればまた元の処に戻すというものである。

但し、木の活字使用が一般的であった。そのやり方は、木の活字を部首にもとづいて字棚に置き、原稿にしたがって字を拾って、木の盤の上には一行に二十二字で、一頁七行である。薄い墨をインクとして、手作業で印刷する。終わったら紙を折って、黄色の表紙を加えて、紙捻で冊子に装丁し、周辺をきれいに切る。最後に木の判で赤い「京報」と「×報房」を表紙に押す。

以上の三点によって、『京報』の印刷技術の発展段階がわかる。すなわち、「豆腐干版」を使っていた時期があり、そして粘土の活字の段階を経て、木の活字を主とする段階に至ったのであり、長期的にこのような遅れた技術を使用して印刷されたのである。光緒三十三年(一九〇八)十月に「聚興報房から出版された『京報』は鉛の活字で印刷されており、またその一年前の同じ報房の『京報』の印刷はまだ木の活字であった。⁽³⁷⁾

その二、内容はほぼ決められていた。どの『京報』でも内容は大体同じである。これは政府が許可した内容でないと発行ができなくなるというのが原因の一つであろう。

『京報』の内容は、まず「宮門鈔」つまり宮内の動向、官吏の任命昇降で、次は「上諭」つまり皇帝の論旨と公告で、そして奏折、つまり大臣らの奏議と報告である。

印刷の条件が制限されるので、一日の『京報』の葉数は多くはならなかった。しかも、各『京報』の「宮門鈔」と「上諭」の内容は完全に同じであり、異なるのは奏折の部分だけであった。内閣が公布の奏折は多

く長いものもあるので、各報房が編集するときを選択に差ができ、長い奏折なら何日間も「続く」ケースもあった。このように各報房の間で『京報』の内容が一部異なっていたので、一定の競争をしながらも、共存することができるのである。³⁸⁾

その三、形式はだいたい同じ。

以下の「(三)『京報』の紙面構成」に詳細。

(三) 『京報』の紙面構成

黄卓明は『京報』の研究のために千部以上の『京報』を収集した。氏の『中国古代報紙探源』によれば、『京報』の形はだいたい九センチ×二十二センチの冊子である。「竹紙」あるいは「毛太紙」に印刷され、黄色の紙を表紙にし、その上に赤い「京報」と「××報房」の字が捺されている。しかし、表紙はすべて黄色の紙に赤い字ではなく、例えば、前述の光緒年間の『京報』には以下の二つ異なる形式がある。一つは「聚陞報房」から出版されたもので、白い紙を表紙にし、その上に赤い「加官晋禄図」と「京報」・「聚陞報房」の文字を組み立てた彫版である。もう一つは黄色の表紙の左上に、小さい赤い紙を貼って、その上には黒い枠の付いた「京報」という文字があるが、出版した報房は記されていないと指摘している。³⁹⁾ また、中身の紙面の形については、一頁七行で、一行二十二字であるとして⁴⁰⁾いる。

戈公振の『中国報学史』商務版第二章の十二と十三頁の間に挟まれている『京報』の表紙の複製品であると思われる。黄色の紙の上は「京報」、下に枠に囲まれている「集文報房」という赤い文字があり、黄色紙は幅九・二インチで、長さは二十二・五インチである。裏にある『京報』の中身の写真は、縦書きの七行で一行は二十三字である。また、泥

版と活字でそれぞれ印刷された「宮門鈔」の写真があり、泥版は四行で一行二十三字であり、(銅?)活字版は五行で一行三十六字である。

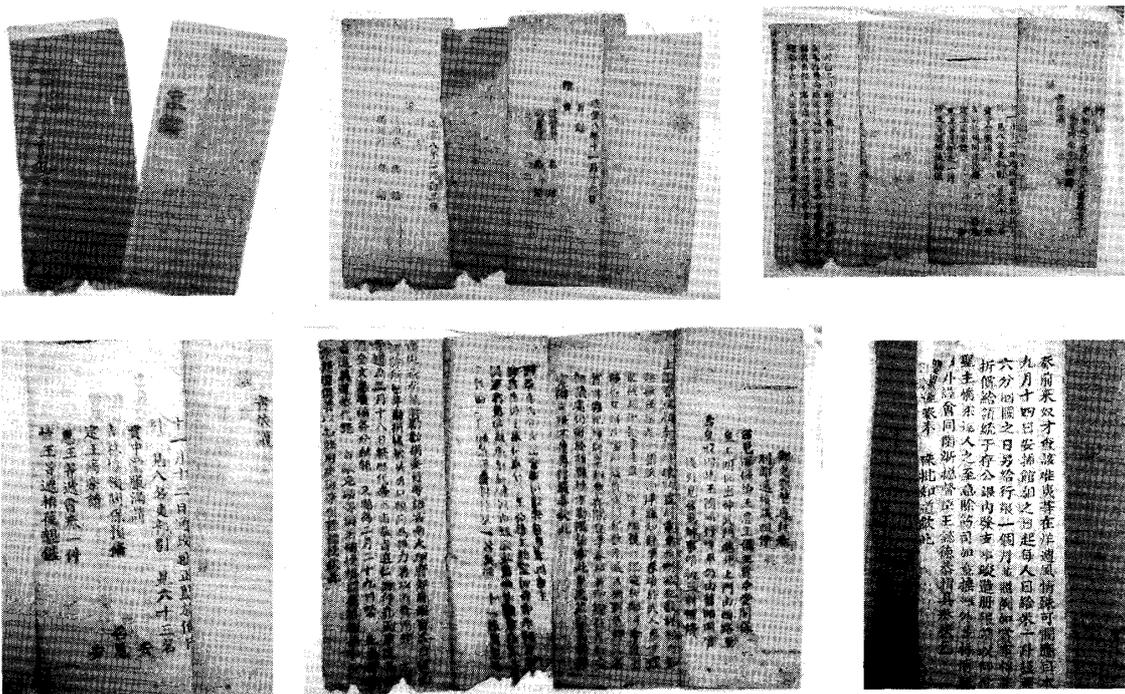
ちなみに小野秀雄教授の『内外新聞史』に掲載された『京報』の写真は「聚恆報房」のもので、中身は七行二十二字である。

また小糸忠吾教授の『中国の新聞千二百年』に掲載されているものは、光緒六年(一八八〇)「聚陞報房」の『京報』で、ちょうど上述の黄卓明が述べた表紙の特例の一つである「聚陞報房」を証明している。すなわち、上に横書きで右からの「京報」という報名があり、報名の下には官吏服の人が手に「指日高陞」と書かれた紙を持っている絵、つまり「加官晋禄図」があり、右下には報房の名称がある。黄卓明の『中国古代報紙探源』一五〇頁の『京報』の写真ははっきり見えないが、これと似ている表紙があるようである。

しかし、王鳳超の『中国的報刊』にある光緒二十一年(一八九五)七月一日の『京報』の写真の紙面構成は黄卓明の記述と違って、枠と版口があり、版口に「光緒二十一年京報 七月初一 上海新聞報館發刊」という文字があり、一頁に縦書き十六行で一行二十五字である。紙面の構成は中国の線装書の紙面とよく似ている。活字の字体はよくできた明朝体で、木の活字ではなく、銅活字の可能性が大きいと思われる。『中国古代報紙探源』(一五三頁)に掲載された『京報』らしい写真は、内容ははっきり見えないが、その紙面の構成が『中国的報刊』の例と似ている。『中国的報刊』の『京報』の注目すべき点としてこれは北京ではなく、上海で出版されたらしいという点である。

(四) 筆者所蔵の『京報』等

筆者は近年来、『京報』などの古代新聞を何点か収集した。



図版 - 三 (白黒) 筆者所蔵『京報』 上左:表紙 上中:目録 上右:目録裏(右に「科抄」)
 下左:「宮門鈔」(咸豊8年11月12日分) 下中:「上諭」
 下右:奏折(咸豊8年2月3日分の最後の頁)

その一、『京報』(図版一三参照)

咸豊八年二月三日(一八五八年三月十七日)と同年十一月十二日(同十二月十六日)の二冊である。

両方とも発行された当時のままの冊子型で、「紙捻」で綴じており、大きさは二十二・五×九・五センチで、黄色の表紙と裏表紙があり、表に赤色の「京報」の印が捺されており、十一月十二日の方には「聚陸報房」という赤色の印があり、当該報房の発行物と分かる。

前者の表紙に「京報」の印以外に、墨筆で「二月初二日」と手書きされた日付があるが、「目録」の日付は「咸豊八年二月初三日」になっている。中身には「目録」「宮門鈔」「上諭」は単葉でそれぞれ一頁、「奏折」が山折で四葉八頁であり、計十一頁である。

木か粘土の活字で刷られたと見られる。全部のページに糸欄がない。「目次」は字数が少ないので、わりとゆったりとした配列である。「宮門鈔」は二十四字×四行で、内容は(紫禁城の?)当番、召見(皇帝が大 臣などを呼寄せること)などである。

「上諭」は二十六字×六行で、内容は奨励や祭祀と官吏の任命である。奏折の頁は二十二字×八行で、陝西省巡撫は官民一体で城を修繕することについての報告をし、奨励を要請する内容で、また、福建省巡撫は台湾の淡水庁が遭難した琉球の船と船員とを保護して、船員を返送した経緯についての報告を内容としている。

後者は同じく「目録」一頁であるが、山折でその裏に「科抄」が刷られて、つまり全冊すべてのページは紙一枚で山折りになっている。そして、「宮門鈔」一葉二頁、続けて「上諭」は三葉六頁と「奏折」四葉八頁で、合わせて十八頁である。

内容と紙面配列は前者と大体同じであるが、前者にない「科抄」は一

行十四字で四行となっており、載っているのは吏部の題奏（大臣の報告の一種）である。奏折部分に載っている二人の大臣の息子が科挙郷試で不正行為を起こしたことについて報告は、実際の報告公布の日（十一月六日）（『清史編年・第九卷（咸豊朝）』五八八頁対照）と登載する日付（十一月十二日）のずれは六日間である。一種の偶然かもしれないが、その間隔は『題奏事件』より少々短縮していた。

また、文中の皇帝に敬意を表すための「台頭」は両者の処理の仕方（違い）がある。前者はほとんど一字に相当する空きを置くことになっているが、後者は奏折の部分と同じく一字ないし二字の空きを置くという処理方法を取り、「上諭」の方は一字を上に出す形になっている。

現存最古の印刷『京報』は、咸豊年間のもので伝えられているが、具体的な発行年月日は不明である。筆者所蔵のこの二点は報告されている『京報』の中で最も古いものである可能性が高い。内容や紙面配列は学者らの記述とほぼ合致しているので、本稿での更なる考察は省略するととする。

その二、『申報』発行の『京報全録』

光緒九年七、八月（一八八三年八月三日―九月三十日）の合わせて五十九日分で、後述の『申報』の附頁で毎日一枚二頁で、収集者が一冊にまとめたと思われる。

線装（和綴じ）の冊子の表紙に墨で「光緒九年京報 癸未七月八月」と手書きされている。大きさは二十八×十八・三センチである。中身は金属（鉛か銅）の活字印刷と見られており、版口を除く三十行で毎行五十二字であり、びっしりとした配列でかなり読みにくい。第一行に「光緒九年七月初一日京報全録」、版口の上部に「京報 第五百零四號」、下に「癸未七月十二日申報附張不取分文」（一八八三年八月十四日『申報』

無料附頁）のように刷られている。北京の『京報』をかき集めて、『申報』の発行地上海でまとめて刊行されているため、情報が半月程度遅くなっていると考えられる。後述のように、『申報』の紙面配列はすでに従来の冊子型から脱皮していたが、附頁としての『京報全録』は『京報』の従来の読者の習慣を考え、また読者が自分で装丁しやすいようにするため、このような紙面の形を取っていたと推測できよう。また、文と文、段と段とを区切るために、空きや「○」を一つか二つかおいている。

内容も従来の『京報』とほとんど変わらない。「目録」がなく、「宮門鈔」もタイトルのみであるが、「諭旨」「上諭」と「奏折」はかなり充実している。一日に一葉二頁のスペースしかないのに、一つの「奏折」が載せきれない場合に、「此片未完」でいったんきって、次の日にまた「接統」で続けて掲載する。また、最後の何行かをより小さい活字を用いて解決する場合もある。

その三、上海蘇報館発行の『京報全録』

光緒二十四年六・七月（一八八三年八月三日―九月三十日）の一冊である。

総体的には上述の『京報全録』と変わらないが、寸法は小さい。二十四・八×十二・二センチで、表紙はその新聞を裏返して利用しており、「光緒二十四年戊戌六、七月文」「六月廿二日起七月卅日止」「京報全録」「慎獨齋存」「京報 上海蘇報館刊」と書かれている。

版口に上から「光緒二十四年京報全録 六月二十二日二三日」と葉数で（月の初日から一になる）、下部に「上海蘇報館敬刊」と刷られている。中身は一行二十字で四十二行である。毎日分のはじめの行に、「六月二十三日京報全録」のように日付を入れてあるが、『申報』の『京報

全録』と異なって、毎日一葉ではなく、文章の量は不等で、終わりに改行して次の日の日付を入れるようになっていた。これらの点から、『申報』の無料添付『京報全録』と異なって、上海蘇報館の『京報全録』が一定時期の分をまとめて発行する可能性があり、当時は多様な発行形態が存在していたということが伺える。

その四、湖南省の『塘報』

光緒二十四年八月十二・十三日（一八九八年九月二十七、二十八日）分で一冊である。

清時代の塘、地方の行政役所や官吏の駐京事務所であり、地方官吏と中央朝廷との情報やり取りの仲介機構という存在で、漢時代の邸を髣髴する。詳細は方漢奇の『中国新聞事業通史・第一巻』（『中国新聞事業通史・第一巻』一八八―一九九頁）に紹介されているので、本稿は贅言を避けよう。

筆者所有のこの一冊『塘報』は十七・五センチ×十センチで、赤い糸での「線装（和綴じ）」である。表、裏表紙を除く正味は二十五葉五十頁であり、頁番号がない。かなり傷んでいるので、版口の上部にある文字が判別できないが、下部は「駐京塘務」である。印刷は活字の墨刷りで、一頁に七行十五字であり、台頭は一字か二字の突出である。用紙には予め赤い糸欄が刷られている。

「目録」には「光緒二十四年八月十二、十三日」「湖南塘務」と刷られているが、実際、中身の「宮門鈔」にあたる頁にはそれぞれ「八月初十」と「八月十一日」と印刷されている。「八月初十」の「宮門鈔」に続いて「上諭」が一葉（内容は一頁しかない）であり、その次は「八月十一日」の「宮門鈔」（一葉）、「上諭」（十葉）、奏折（十一葉）の順である。

『塘報』は行政部門が発行したものはずであるが、正味に少々良い紙が使われ、台頭の様式がしっかりと守られていること以外、内容にして、印刷や活字の質にしろ、民間発行の『題奏事件』や『京報』などとあまり変わりがない。

三、萌芽期の新聞の紙面構成についてのまとめ

まず、中国新聞の萌芽期をいつまでと区切るかについて、もし『京報』の消失をその終焉と考えれば、一九一〇年代になる。しかし、これには次に考察する「成立期（一八一五年―一八七四年）の全期と「発展期」の一部が重なることになる。もちろん、歴史の流れをみると、一つの時期がまだ完全に終わらないうちに、次の時期がすでに始まりつつあることはよくあることである。特に中国の新聞事業は、その萌芽期とりわけ萌芽期の後期には中国北部にある首都北京を中心に展開されていたが、成立期は南部を中心に、実際には海外において展開されていたからである。国土の大きさと封建的統治態勢の閉鎖性のため、南部の新聞がかなり近代になっていながらもかわらず、北部の『京報』はまだ存続しており、かつ影響も大きかったのが事実である。これらの要因を考慮して、中国新聞の萌芽期は十九世紀の中期、『京報』は発達して、一定の形になった時期をもって区切るほうがよいのではないかと考えられる。以上の検証によって、中国萌芽期における原始形態新聞の紙面構成について、いくつかの点をまとめることができよう。

その一、「邸報」が漢時代にあるという説は、実物の証拠はなく、確実な記録もないので、紙面構成については何とも言えない。

その二、唐朝の「報状」や『進奏院状』は、発見された実物が敦煌巻

子の二件しかなく、かつ手書きであり、書くときの紙面上の随意性が大きいので、新聞編集の視点からの紙面構成の考察にあまり意味はないと思われる。

その三、「邸報」の印刷品はまだ発見されていないが、最も早い『京報』の実物は北京図書館に収蔵されている道光十三年（一八三三）の手書き『京報』であると、最も早い印刷物は清咸豊年間（一八五一—一八六一）のものがあるようである。筆者所蔵の日付の最も古い『京報』が咸豊八年二月三日（一八五八年三月十七日）のもので、したがって、日本国立国会図書館、中国国家図書館などで発見された一七七六年からの『題奏事件』は、民間発行の日刊紙として、恐らくいままで報道されている最も早い印刷された中国の古代新聞である。よって、古代新聞の紙面構成について、その研究の始点は十八世紀中期にまで遡ることができるとなっている。

その四、『題奏事件』や『京報』の紙面構成の根幹には、やはり中国の線装書の伝統形式から受けた影響が強いと認められ、縦書き・見出しなし・改行しない・冊子型の装丁などの点で特徴を表していた。しかし、原始型の新聞でありながら、報道のニュース価値や速さはすでに重視されており、かえって新聞そのものの保存価値はあまり考えられていなかったようである。「速報性」を求めるあまり紙などの材料や印刷・装丁作業などの粗末さは、紙面からもはっきりわかる。一方、収集した材料を編集して、限られた空間（紙面）に入れるという新聞編集についての考慮と腕の端倪も見え、記事をある基準に従って順番に掲載する意識も強まりつつあったようである。

その五、筆者所蔵の『申報』と上海蘇報館それぞれ発行した『京報全録』について、時期的にはすでに萌芽期の終焉より半世紀も遅れている。

『京報』の消失は二十世紀初頭といわれている。しかし、当時、資本主義要素は相当発展していた上海を本拠地とした、中国新聞発展期の代表格の『申報』をはじめとして発展期の各紙は、『京報』を別紙で転載することは、『京報』が報じた皇帝や朝廷の動向は、広範な読者層を持っていたことを伺うことができる。また、後述の検証で分かるように、『申報』の前期の紙面は伝統的冊子型と現代新聞紙面の間の中間パターンを採用していた。最初、『京報』の内容を中身に転載するのみであったが、のち『京報全録』のように別紙を設けて、伝統書籍の紙面に近い形を採用して発行するようになった。この何百年間と続いていた冊子型の古代新聞の形は、当時の読者にとって受け入れやすい形であったといえよう。

萌芽期の中国新聞としてその紙面の構成は確かに原始的で、近代的新聞の概念によれば、ほとんど新聞とはいえないほど幼稚的である一方、社会の発展と読者の需要によって、緩慢でありながら、少しずつ新聞の要素を身につけるようになってきたことは事実である。ある新聞としての要素として、例えば発行の頻度（日刊かつ朝夕刊）や内容のニュース性についていえば、『京報』はのちの成立期の新聞よりずいぶん先行していたといっても過言ではない。

第二節 中国語新聞の成立期の紙面

（一八一五年—一八七四年）

一八一五年、マラッカにおいて創刊された最初の中国語の近代的新聞と言われる『察世俗毎月統記傳』に始まり、中国人によって最初に成功

した中国語日刊紙『循環日報』の一八七四年創刊に至る時期を卓南生は中国近代新聞「成史」とする。本稿でもこれに従って、この時期を中国語新聞の「成史」と名付けることにする。なお、本節では卓南生の著書『中国近代新聞成史』の研究成果をもとに、主に分析を進めた。これらの新聞の中には、何紙か紙面構成の考察にとって重要な意義をもつと思われるものがある。それは『察世俗毎月統記傳』、『香港船頭貨價紙』と『香港中外新報』、『中外新聞七日報』と『香港華字日報』である。本節ではこれらの新聞を中心にして、成史期の紙面構成の流れを検証しようと思う。

一、最初の近代型中国語新聞『察世俗毎月統記傳』

(一八二五—一八二二年)

(一) 創立者たち

最初の近代的中国語新聞『察世俗毎月統記傳』は一八一五年八月五日(嘉慶二十二年七月初一)、当時のマレーのマラッカにおいてロンドン伝道協会により創刊された。創立者は同協会の宣教師モリソン(Robert Morrison 中国語名: 瑪禮遜 一七八二—一八三四年)、さらに編集者は同じく宣教師のミルン(William Milne 中国語名: 米憐 一七八五—一八二二)であり、印刷仕事を主に担当した宣教師メドハースト(Walter Herry Medhurst) 中国語名: 麥都思 一七九六—一八五七年)である。また印刷助手として雇用されていた中国人の梁發(或いは「梁亞發」一七八九—一八五五年)は『察世俗毎月統記傳』に多くの貢献をした。

(二) 創刊の経緯

十八世紀後半、イギリスはすでに世界的強国になっており、産業革命による商品の販売と原料の確保のため、閉鎖鎖国の中国の大門を開こうとしていた。その手段としたのがアヘンの密輸であり、一方で、宗教の宣伝によって中華民族の伝統的思想を変えようとする方策も重要視されていた。

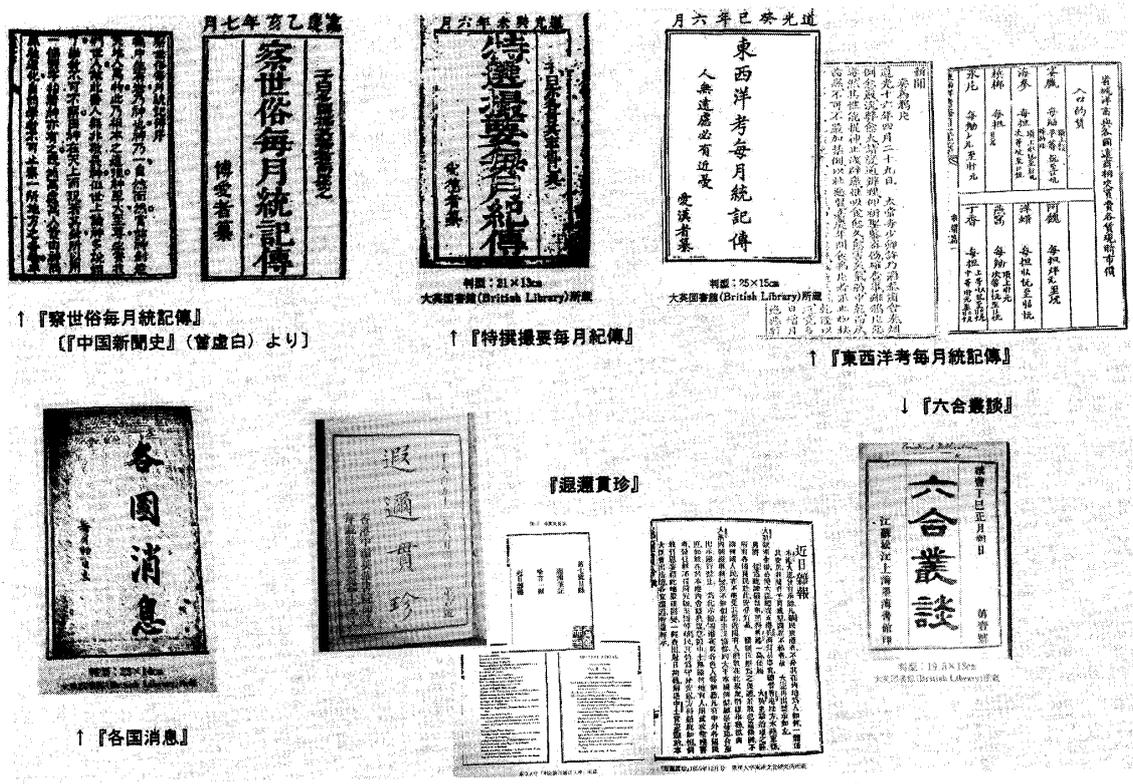
一八〇七年春、モリソンはロンドン伝道協会に派遣され、中国に宣教しようとしたが、中国清政府がキリスト教の宣伝と印刷物の発行を厳しく制限したため、モリソンはやむをえず、宣教の基地を中国の本土ではなく、中国の南方と近く交通が便利で、しかも華僑の多いマラッカにおいていた。

中国語を習得したモリソンはマラッカで中国語の月刊紙の発行や、教育伝道のための学校の設立など宗教事業を計画した。一八一五年四月十七日、ミルン夫妻が数人の中国の印刷職人を連れて、広州からマラッカに到着し、中国語紙発行の準備に加えた。同年八月五日、中国人のための無料学校「立義館」の開館とともに、『察世俗毎月統記傳』の発行が始まった。主要執筆者はモリソンとメドハーストの他に、印刷職人の梁發も文章を書いたことがあると言う。彼はその後、中国人最初のキリスト教宣教師になった。

『察世俗毎月統記傳』の廃刊は一八二一年で、ミルンの健康の悪化がその原因だと推測される⁴³⁾。彼は一九二二年に死去した。

(三) 発行事情

『察世俗毎月統記傳』はマラッカで発行されていたが、発行対象地はマラッカだけではなかった。華僑の多い東南アジア各地と中国の数省に



図版 - 四 (説明がある以外は『中国近代新聞成立史』より)

無料で、友人や通信員、旅行者を介し、あるいは船便で配布されていたようである。発行間隔は一カ月で、毎月一号、最初の三年間は毎号五百部、一八一九年には千部に達していた。毎年ものが合刊の形で再版され、また、一部の文章が小冊子の単行本として出版されることもあった。しかし、当時の中国の閉鎖性を考えると、中国本土に流入したのはわずかだったと思われる。

(四) 編集方針と内容概要

『察世俗每月統記傳』が最も重視していた内容は、キリスト教の教義の宣伝で、「神理」「聖書の大意」など直接伝教するものが多く、各号の内容の半分を占めたという。そして、天文知識を中心にして科学知識や「全地万国紀略」のような地理・社会に関する文章を連載するなど、西洋の知識の宣伝にも力を入れていた。

ニュースはわずかしか掲載されなかったが、嘉慶乙亥年(一八一五年)八月号に月食を予告する記事や貧困者の救済に関する「お知らせ」のような記事がみられたという。⁽⁴⁾

文章の特徴については、ことさらに儒教の言葉を使って、キリスト教義を解釈し、中国人に馴染んでいる「章回体小説」(回数を分けて記述する長編小説——筆者)の書き方も採用していた。これらの特徴はその後の宣教師によってつくられた中国語紙の一つのパターンになった。

(五) 紙面構成(図版一四参照)

『察世俗每月統記傳』の原物は中国本土にはないようで、大英図書館に所蔵されている。文献の記載によれば、その形は小冊子状で、大きさは十九×二十二センチである。その表紙は上に清朝の嘉慶年号を右から

書いて、その下の真ん中に縦書きの「察世俗毎月統記傳」のタイトル、右側は「子曰多聞擇其善者而從之」で、左側は「博愛者纂」である。

年号について、曾虚白が編集した『中国新聞史』（一二七頁）に掲載している表紙の写しは「嘉慶乙亥年七月」（一八一五年八月五日〜九月二日）で、卓南生の『中国近代新聞成立史』（四三頁）では「嘉慶丙子年全年卷」（一八一六年一月二十九日〜一八一七年二月十五日）というように、標記方法が少々違っている。それは、前者は発行当時のもの写しで、後者は毎年の分の再版した合本の表紙であるからだと推測できよう。⁽⁴⁵⁾

タイトルの『察世俗毎月統記傳』は、同紙の英文名『Chinese Monthly Magazine』（中国語月刊）の意識で、意味するところは「世俗を觀察しよう」ではないかと思われる。

「子曰多聞擇其善者而從之」（子曰く、多く聞きて其の善き者を擇びて之に従ひ⁽⁴⁶⁾）について、この文句は『論語・述而二十八』から引用されたが、『The Chinese Periodical Press, 1800〜1902』の著者ブリトン（Roswell S. Britton、中国語名：白瑞華）は、この文は孔子の二つの言葉を合わせたものであるという説があるようである。⁽⁴⁷⁾

「博愛者」というのはミルンのペンネームで、「纂」は編集という意味である。

『察世俗毎月統記傳』は木版彫印、明朝体字で、毎月一号発行して毎号五〜九葉十〜十八頁⁽⁴⁸⁾、一頁に七〜八行で、一行は二十字があり、文章には句読点が付いているが、行線はない。版口と枠があり、版口の上に「察世俗」という略称がみえ、下には頁数がある。中身の紙面構成は中国の線装書とそっくりである。

(六) 紙面構成の要因

イギリスで最初の日刊紙であり近代新聞紙面である『デイリー・クーラント（The Daily Courant）』は一七〇二年に創刊されたからすでに百年以上を経ているが、一八一五年にイギリス人によって作られた中国語新聞がなぜ近代的な紙面ではなく、中国の伝統的な書籍のような紙面構成を選んだのかという疑問について、いくつかの理由が推測できよう。その一、内容によるもの

『察世俗毎月統記傳』の内容は現代の新聞概念でのニュース性はなく、現代における「新聞（newspaper）」と言うには少々無理があると思われる。実のところ『察世俗毎月統記傳』の英文タイトルは「Magazine」、つまり「雑誌」ということで、創立者もこれを「newspaper」とは思っていなかったようであり、発行間隔も一カ月、つまり月刊である。発行の目的はニュースの伝達というより宗教の伝道にあるため、文章も宗教的な説教がほとんどで、ニュース記事に特有の時間性はあまりない。

この問題について、卓南生はこう指摘した。「われわれが関心を持つのはミルンたちのキリスト教の伝道よりも、その『定期刊行物』の出版のことと言わなければならぬ。つまり、彼らは伝道の産物として、『定期刊行物』とは何かということをも中国人読者に紹介したのである。

これは十九世紀五〇年代以後近代華字日刊紙の発生にも影響があることは言うまでもない。無論『察世俗』はあくまで『宗教刊行物』という枠を越えることはなかった。なぜならば、その内容は圧倒的に宗教関係の記事が多いからである。また編集者ミルンはジャーナリスト的なセンスがかなり強いにもかかわらず、全般として同紙の内容はそれほど『時宜性』を重要視していなかったからである。こういう視点から考えれば、

同紙は「a monthly journal」(月刊ジャーナル)より「a periodical tract」(定期的冊子)と呼ぶほうがふさわしいという中国新聞史研究者ブリトンの評言は妥当かもしれない。⁽⁴⁹⁾

また、『察世俗毎月統記傳』は年毎に合本を再版し、その発行部数は創刊の年の一八一五年では七二五部(毎月号発行部数は五百部)、廃刊の年はなんと二千部(毎月号発行部数不詳)にも達した。⁽⁵⁰⁾ そのことから、『察世俗毎月統記傳』はその内容と時間性との関係は非常に薄く、むしろ保存の価値は新聞より高かったと傍証できよう。

同紙の協力者であり、ミルンの後継者と見られるメドハーストも『察世俗毎月統記傳』について「此書名叫察世俗毎月統紀(原文のまま)傳……(この本は察世俗毎月統紀傳と呼ぶ)」と述べた。つまり当事者も『察世俗毎月統記傳』が新聞ではなく「書(本)」と認識していたわけである。⁽⁵¹⁾

刊行物の紙面構成は、やはりそれ自体の内容によるものであり、『察世俗毎月統記傳』はその内容に従って、近代型新聞紙面の構成を採用せず、冊子や本の形にしていたことは、当時としてはかなり合理的な選択であったと思われる。

しかし、卓南生の次の論述にも意義はあると言えよう。「『察世俗毎月統記傳』の誕生は、それまで中国の支配階級や一部の上層社会にしか読まれていなかった『官文書』を中心とする『邸報』など中国における『古代新聞』以外に、もう一つ新しい新聞のパターンを提供したものと(52)いって間違いない」。

その二、対象によるもの
 いうまでもなく、『察世俗毎月統記傳』の対象は中国人であった。また、実際の主な読者は本土ではなく外国にいる華僑であったのだが、中

国人は世界のどこにいても、地元の社会の中で、かなり固い中国人の小社会を形成するのが事実であったので、華僑に『察世俗毎月統記傳』を受け入れられるようにするためにも、中国人のなれている形のものほうが都合がよいという創立者の考慮もあったかもしれない。すなわち、文章の表現になるべく中国人になれた言葉を使用するだけではなく、刊行物そのものの外観までもをできるだけ読者の反感を起ささないような形にしなければ効果が上げられないと考えられていたのである。

また、清政府の当時西洋人の宣教活動に対する取り締まりは極めて厳しかったので、本土では公開的な宣教活動はほぼ不可能であった。もし、『察世俗毎月統記傳』の外観が一目瞭然中国の伝統的文化のものではないとわかれば、本土に流入するの可能性は一層薄くなることを創立者は考えていたと推測できる。

その三、条件によるもの

『察世俗毎月統記傳』の創刊当時、創立者たちは中国語の発行物のためにいろいろと物質的な準備をしなければならぬ一方で、編集者としての自身の中国語表現力や中国人そのものを理解しようとしても、なかなか理解することができないなどの実情に悩まされていたことは間違いないだろう。そこで発行物の紙面の構成は、中国の書物の伝統的なやり方に従ったのかもしれない。『察世俗毎月統記傳』は中国人向けの中国語の発行物であり、中国人の職人によって版が彫刻され、言うまでもなく、これらの中国人の彫版職人は千年以上の伝統をもち、既に中国の書籍の様式になれている。したがってこうした紙面構成を採用したことは、当時において比較的自然なことであったと言えよう。

二、後継紙とその他

(一) 『特撰撮要毎月紀傳』(一八二三—一八二六年)

ミルンの死後、『察世俗毎月統記傳』時期の協力者の一人メドハーストは一八二二年にバタヴィアに行き、一八二三年七月に中国語の月刊紙を創刊した。メドハーストの回想録によると、彼の願いはミルンの死によって停刊された『察世俗毎月統記傳』をバタヴィアで復刊させることにあり、ただタイトルを改めて『特撰撮要毎月紀傳』と呼んだという⁽⁵³⁾。したがって、『特撰撮要毎月紀傳』の内容の仕組みは『察世俗毎月統記傳』とほぼ同じで、宗教的「説教色」が『察世俗毎月統記傳』より少し濃いという感じがある⁽⁵⁴⁾とされる。

『特撰撮要毎月紀傳』の表紙は『察世俗毎月統記傳』より少し大きく、二十一×十三センチで、模様は『察世俗毎月統記傳』と同じパターンで(図版一四参照)、上は年号、真ん中はタイトルで右は『論語・先進篇十一』からの語録「子曰亦各言其志也已矣」(子曰く、亦各其の志を言ふのみと)⁽⁵⁵⁾で、左は「尚徳者纂」、つまり編集者メドハーストのペンネームである。中身の紙面構成の記載は見つけられず、ただ「竹紙木刻印刷、每冊八頁⁽⁵⁶⁾」と記載しているが、『察世俗毎月統記傳』と変わらないと推測できよう。

『特撰撮要毎月紀傳』は一八二六年に廃刊された。

(二) 『天下新聞』(一八二八—一八二九年)

『天下新聞』は『特撰撮要毎月紀傳』が廃刊されて二年後、一八二八年に再びマラッカで発行された中国語の発行物で、原物は未だ発見され

ていないので、内容—とくに紙面構成—に関する記録は極めて少ないが、次のようにまとめられよう。

創立人は前述したメドハーストで、編集者はキッド (Samuel Kidd 中国語名：吉徳 一七九九—一八四三年)⁽⁵⁷⁾である。二人のイギリス商人から資金を集め、商業性を試みたという。内容はすでに宗教や科学知識を主にしていたのではなく、ヨーロッパと中国のニュースが主体である。『天下新聞』は活字を使って新聞用紙で印刷された大判の新聞と言われるが、発行間隔はわからず、一年しか発行されなかった。同紙は最初の近代型中国語新聞だと思われ、また、近代型紙面をとった理由は宗教の宣伝ではなく、商業性をもって、ニュースが重要視されていた新聞紙であったからと考えられよう。残念ながら実物による検証はまだできていない。

(三) 『東西洋考毎月統記傳』(一八三三—一八三五年、一八三七—一八三八年)と『各国消息』(一八三八年)

『東西洋考毎月統記傳』は中国の本土で、外国人により発行された最初の中国語新聞である。創立人兼最初の編集者はドイツの宣教師ギッツラフ (Charles Gutzlaff、中国語名：郭實獵⁽⁵⁸⁾あるいは郭士立⁽⁵⁹⁾) (一八〇三—一八四五)であり、一八三三年八月一日に広州において創刊された。しかし、ギッツラフは忙しいため、たびたび休刊して、ついに一八三五年に『東西洋考毎月統記傳』を彼が主宰した団体「在華实用知識傳播会」に譲渡した。そして一八三七年から一八三八年に同紙はギッツラフとジョン・モリソン (John Rober Morrison 中国語名：馬儒翰 一八一四—一八四三) によって復刊され、新『東西洋考毎月統記傳』と呼び、二人は広州で編集して、シンガポールで印刷した。その後、メドハース

トがシンガポールで廃刊まで編集していたという。⁽⁶⁰⁾

『東西洋考毎月統記傳』の紙面構成の概観はまた『察世俗毎月統記傳』と似ていたが、いくつかの相違点がすでにみられていた。(図版一四参照)

形としてはまだ冊子状の月刊紙、毎号一冊二十頁くらいで、連史紙に彫刻印刷されており、大きさは二五×十二センチ、『察世俗毎月統記傳』より大きい。表紙は上に年号、真ん中はタイトルで、左下には「愛漢者纂」という編集者のペンネームがあり、その間に「人無遠慮、必有近憂」(子曰く、人遠慮無ければ、必ず近憂有り)、『論語・衛靈公十二』⁽⁶¹⁾という『論語』から引用された言葉が挟まれている。戈公振によれば、号によって言葉を変えることもあり、ほとんど「四書」からの引用であり、字体は表紙も中身も明朝体ではなく、楷体を使用していた。中身の紙面は、枠と版口があり、版口の上はタイトルの「東西洋考毎月統記傳」で、下は頁数であり、内容は縦書きの十行二十四字で、行線はない。天文、地理に関する図版もあり、南洋の地図はカラーで、手で塗っていたという。⁽⁶²⁾

『東西洋考毎月統記傳』の目的と方針は『察世俗毎月統記傳』などの純粹な宗教刊行物と異なって、卓南生の分析によると、「中国人の西洋人に対する偏見をくつがえそうとしていたのであり、したがって中国における欧米人の共通利益を守るはこの『東西洋考』創刊の主要目的なのである。……西洋の文化を宣伝して、中国人の西洋人に対するイメージを変えることに置かれていた……」⁽⁶³⁾とされている。

従って、内容には宗教刊行物のような長い教義説教文は見えず、西洋の科学知識の紹介に重点をおいていた。しかも、中国語新聞紙に初めて「新聞(ニュース)」欄を設けた。もちろんその「新聞」欄の内容は、現

代のニュースの概念よりむしろ各国事情の紹介であり、その中で『京報』による「アヘン禁止」の内容の奏折も掲載されていた。もっとニュース性をもつ欄目は「市場價格」欄(図版一四参照)で、このような欄目の設置も『東西洋考毎月統記傳』が最初であった。この欄の紙面構成は、頁の真ん中が二本の線で切断され、上下二段に分られており、紙面を有効に利用しようとしたと見られる。

また、一八三八年にメドハーストはイギリス人ヒリヤー(Charles Batten Hiller 中国語名: 奚禮爾 ?—一八五六)の協力で『各国消息』(図版一四参照)を広州で発行したことがある。石版刷りの月刊紙で、毎月一日、毎号八頁で構成され、⁽⁶⁵⁾しかもわずかの号数しか発行されなかった。内容と形式は『東西洋考毎月統記傳』と姉妹紙のようにそっくりで、宗教、科学などの記事は全くなく、各国のニュースや、広州の市場商品価格を主にしていた。

宗教人による中国語新聞紙の中で宗教宣伝の内容が消えて、かわりにニュースや商業情報を掲載することは、時代と社会情勢の変化にともない、読者の新聞紙に対する要求も変化しつつあったことに対応しようとする編集者たちの判断によったと思われる。

(四) 『金山日新録』(一八五四—?)

『金山日新録』(Golden Hills News)はアメリカにおける最初の中国語新聞紙で、創立者はキリスト教の牧師スピアー(Rév William Spear)であり、一八五四年四月二十二日にサンフランシスコにおいて創刊された。週刊紙で、土曜日発行、毎号一枚で、手書き石版印刷である。同紙は中英文の合刊紙で、内容は中米ニュース、貨物價格、船期、広告などであり、数カ月間しか発行されなかった。⁽⁶⁶⁾

紙面構成について、さらに詳しい記録はないが、アメリカで発行され、かつ中英文合刊であるので、近代型の紙面を採用されていたと推測できよう。

(五) 『遐邇貫珍』(一八五三—一八五六年)と

『六合叢談』(一八五七—一八五八年)

香港の最初の中国語月刊紙である『遐邇貫珍』と上海の最初の中国語月刊紙である『六合叢談』とは姉妹紙で、類似点が多い。(図版一四参照)

まず、発行地の環境と創立者の身分について、アヘン戦争後、一八四二年に結ばれた中英不平等条約「南京条約」によって、香港はイギリスに割譲され、上海は他の四つの港とともに開港されて、外国人の活動しやすい環境ができた。そのため、外国の宣教師たちは中国本土に進入しようとしていた。『遐邇貫珍』の編集者はメドハーストから、『各国消息』の協力者だったヒリヤーへ、またレッグ (James Legge) へと転々と変わったが、『六合叢談』の編集者はロンドン伝道協会から上海協会印刷所へ局長として派遣されたワイリー (Alexander Wylie 中国語名：偉烈亞力 一八一五—一八八七年) であり、両方とも宗教関係者であった。

次に、内容について両紙とも宗教宣伝の論文とニュース、そして西洋文明と西洋人の良さを紹介する記事に重点を置いていたが、その狙いは中国人の西洋と西洋人に対する「蛮夷」のイメージを変えようと努めることにあった。

また、両紙のタイトルの仕組みや表紙、並びに中身の紙面構成は非常に相似している。

『遐邇貫珍』と『六合叢談』の中国語の意味とその構成の一致性について、卓南生は『中国近代新聞成立史』の九八頁と一一八頁で詳細に指摘している。大きさは、『遐邇貫珍』は十九×十二センチで、『六合叢談』は十九・五×十三センチで、ほぼ同じであり、表紙の構成は両紙とも大枠の中で、縦に三分割し、右から縦書きで年号と号数、タイトルそして印刷者とし、異なるのは香港の『遐邇貫珍』が西暦を採用し、上海の『六合叢談』が清皇帝咸豊の年号を使用していたところである。⁽⁶⁷⁾

『遐邇貫珍』は中国最初の鉛活字印刷の中国語新聞紙といわれており、『六合叢談』の印刷もそれに沿った。『遐邇貫珍』の用紙について卓南生は白い用紙と述べたが、『中国近代報刊名録』では「竹紙単面鉛印、十六開線装書形式」と記載している。⁽⁶⁸⁾

中身について『遐邇貫珍』は初めて中国語の発行物に英文目次を入れたが、『六合叢談』も同じであった。紙面構成では『遐邇貫珍』は枠と版口がつき、半葉十三行で一行(台頭の二つ字を含む)三十字で、楷体字である。注目すべき点は、句読点がつけられているほか、文章の中で国名、地名は双線で、人名、船名などは単線で傍線を付している。これは、内容によっては文章に大量の外国語の訳名が出ることもあり、それを分かりやすくするための編集上の腕と思われる。『六合叢談』の中身の写しはないが、『遐邇貫珍』と変わらないと推測できる。

また、『遐邇貫珍』は「近日雑報」というニュース欄や「佈告編」という広告欄を設けていたが、『六合叢談』のニュース欄はすでに一般ニュース、新刊書紹介と経済ニュースの三部に分けていたという。

両紙とも月刊紙であるが、『中国近代新聞成立史』九九頁と一一九頁は『遐邇貫珍』は初めて発売料金を表紙に明記し(毎冊十五文)、『六合叢談』は十二文であったという。

三、近代型新聞の紙面構成を採用した最初の新聞紙

『香港船頭貨價紙』の登場から、近代型新聞紙紙面はついに出現した。以下、『香港船頭貨價紙』及び『香港中外新報』、そして『中外新聞七日報』及び『香港華字日報』の紙面構成について検証したい。

(1) 『The Daily Press』と『香港船頭貨價紙』と『香港中外新報』の関係について

近代新聞紙の形を採用した中国語の第一紙『香港船頭貨價紙』及び最初の中国語日刊紙の一つである『香港中外新報』の紙面を検証するため、両紙とその親新聞の『The Daily Press』との、そして所有者のマロウ (Yorick Jones Murrow 中国語名：孖刺 一八一七—一八八四年) との関係を述べる必要がある。

一八五七年創刊された『The Daily Press』は香港最初の日刊英字紙で、初代発行人はアメリカ人ライダー (George M. Ryder 中国語名：頼登) であるが、同紙の主要責任者マロウが、翌年一八五八年に同紙の全株を取得し、『The Daily Press』を自分の所有物とするところとなった。そして『The Daily Press』は一般に『孖刺(西)報』と呼ばれていた。

マロウは商人で、早くから(一八四四年以前)中国の広州で貿易活動をしてきた。そのため在華の外国商人の経済情報への需要がよくわかっており、貿易に関する情報紙の発行に手を伸ばした。彼は諸情報の中できくに「船」に関する情報を重視し、また、成長しつつあった中国の商人の情報願望にも注意を払っていた。『The Daily Press』創刊一カ月

後には、すでに中国語の船情報紙『香港船頭貨價紙』を発行し始めたことから、マロウには「当初から中国語新聞創刊計画があったとみたほうが妥当であろう」と卓南生が指摘しているとおりである。⁽⁷⁰⁾

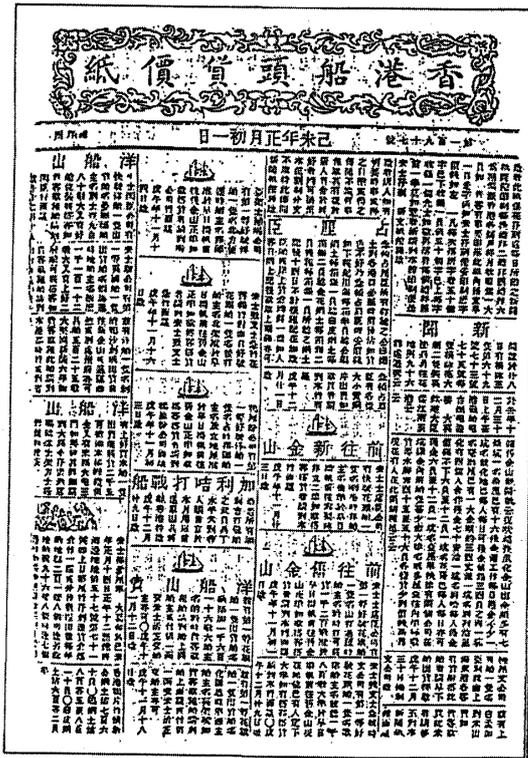
『香港船頭貨價紙』は『The Daily Press』の中国語版として一八五七年十一月三日に創刊したと推定され、毎週火・木・土曜日に発行された。

発見された原物と各方面の文献資料によって、『香港船頭貨價紙』は一八七三年以降週三刊から日刊に変わり、同時に『香港中外新報』というタイトルに変更したと推定されるが、同紙は一八七一年に廃刊になったとされる。⁽⁷¹⁾

(2) 『香港船頭貨價紙』の紙面構成

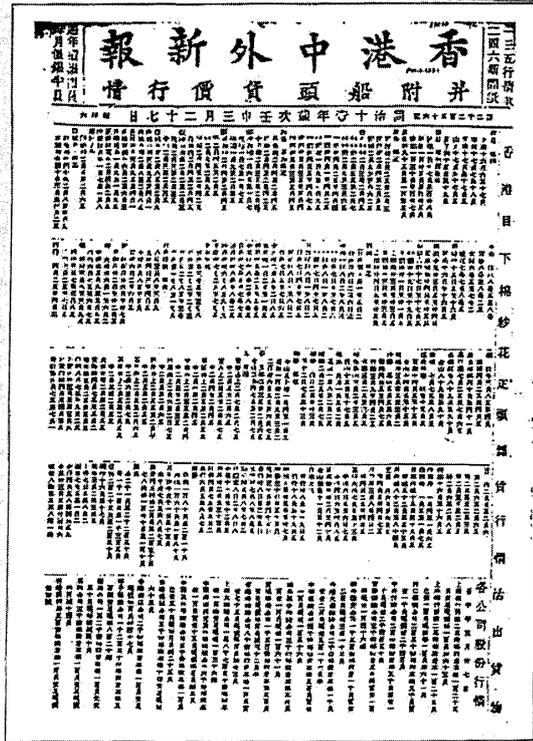
上述のように、『香港船頭貨價紙』は『The Daily Press』の中国語版であり、主な内容は商船の出入港期・商品価格・広告など商業貿易情報であり、『The Daily Press』から訳して載せたものである。例えば、アヘン相場や、船期リストが『香港船頭貨價紙』の毎号の一面左下と二面の右上にそれぞれ決まった位置に掲載されていた。

『香港船頭貨價紙』はタブロイド判の活字の両面印刷で、初期は毎号一枚だけである。「第一百九十七號」の一面(図版一五参照)をみてみよう。上に右から横に「香港船頭貨價紙」というタイトルが花模様で囲まれ、すぐ下に右から発行号数・年号(旧暦)と曜日がある。本文の部分は縦で四つの基本欄に分けられており(本稿における紙面の割り付けについての表現は縦で分けると「欄」と言い、横に分けると「段」というようにする)、一欄は縦で十行あり(最左の欄は九行?)、一行の字数は上から通算したとすると五十八字くらいである。しかし記事やコラム



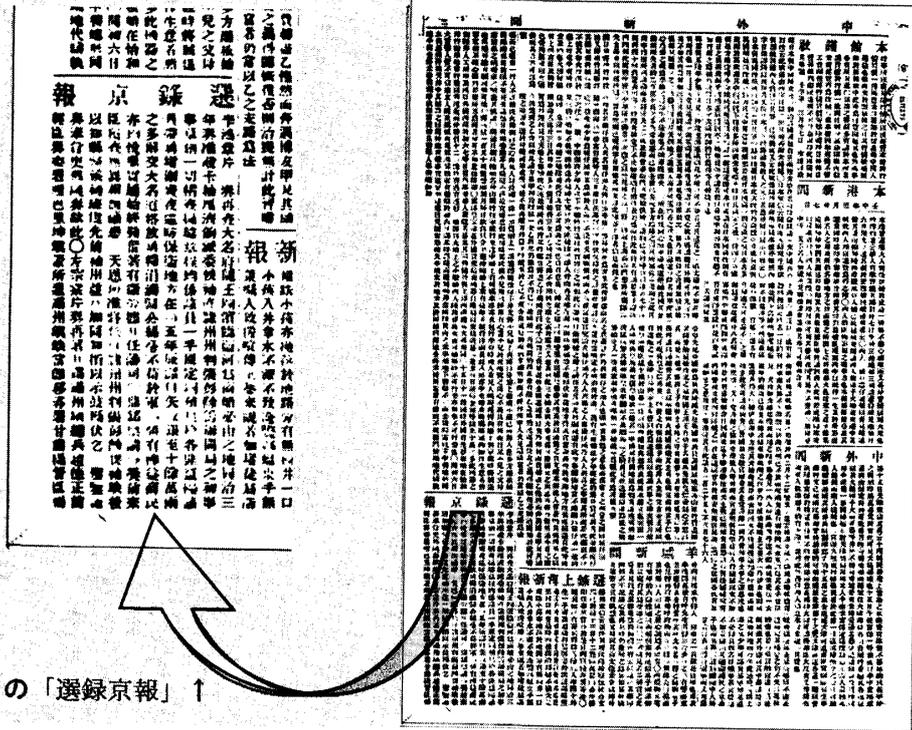
判型：タブロイド判 アメリカ・エセックス研究所(Essex Institute)所蔵

↑『香港船頭貨價紙』



判型：大判 イギリス・ケンブリッジ大学図書館所蔵

↑↓『香港中外新報』



↑『香港中外新報』の「選錄京報」

図版 - 五 『中国近代新聞成立史』より

内容の多少によっては、線で横に切断し、より読みやすくされている。右上の社告には見出しがつかないが、他にニュースのコラム「新聞」や船期情報、広告など記事の頭に見出しのようなタイトルがあり、時には文字なしでただ船の模様の絵がつけられている場合もある。総体的に言えば、この『香港船頭貨價紙』の第一九七号の一面はかなり筋道が整っており、それほど読みにくくなく、初期の中国語新聞として相当な成熟度を示した紙面構成であると言える。

(三) 『香港中外新報』の紙面構成

『香港船頭貨價紙』の直接後継紙である『香港中外新報』は、大きさはすでに大判になっているが、紙面全体のスタイルはまだ『香港船頭貨價紙』を継承したようである。(図版一五参照)

一面の上部のタイトル「香港中外新報」の右には「一三五行情紙 二四六新聞紙」(月水金曜日は相場紙、火木土曜日は新聞紙)があり、左には「週年價銀四員 毎月價銀半員」(年価格四元、月価格半元)という発行価格が示されており、タイトルの下に「并附船頭貨價行情」がある。そして号数、清年号の日付と曜日がある。

一面の割り付け方法は、『香港船頭貨價紙』と違って、横に上から五段に分けて、一番下の段は少し高いが、現代の漢字系統書き新聞の基本的割り付けの幼稚型とは言えよう。そして、右に上から「香港目下棉紗花疋頭雜貨行情沽出貨物」という総標題で、その左に各種類の相場を縦書きで並べている。

二面の総標題は「中外新聞」(中国と外国のニュース)で、割り付けは縦の基本欄の様式で五欄に分けて、一欄に十行、一行は上から通算九六字である。全紙面に「本館謹啓」「本港新聞」(本港ニュース)「選録

京報」(『京報』抜粋)(図版一五参照)など六つのコラムのタイトルを除いては、ほぼ活字を一杯に綴じ込んでおり、一つの区域の中での各記事始末の間に「○」が入れられている。しかし最も長い行は六八字もあるもので、相当に読みにくいのではないかと思われる。

三面と四面の基本的割り付けは二面と同じであるが、三面においては右の一欄の上から五分の四くらいまでが二面の「選録京報」の続きであり、主な内容は「來往商船」で、四面は「各款雜錄」(雜記事)である。その概観は、『香港船頭貨價紙』の一面と変わりがない。

ところが、三面上部の真ん中に、注意すべきところがある。つまりこれまで五つの基本欄の割り付け様式が破られて、三欄の幅を占めた枠が形成され、その枠の右に「現在香港澳門黃浦落貨往各埠之船名同列如左」のタイトルがあり、左に船期情報が十八行に分けて並べられている。これについて指摘したいのは、まず、このような紙面の基本的割り付けの「欄」あるいは「段」を破ることは、伝統的書籍の紙面の割り付けでは無理があるが、現代の新聞の紙面構成においては常識的なやり方とされており、中国で編集の専門用語としてこれを「破欄」と呼んでいる。しかし、百三十年前の中国語新聞の草創時期にも「破欄」の糸口がすでに現れていた。

そして、この枠の中での行と行の間隔は、同紙面の他の記事より著しく広く、全紙面に一つの「白地」ができた。これは編集者が意識的に考えたものではなかったかもしれないが、紙面のこの区域は読者の視線を引き付けやすいことは明白であると思われる。

(四) 『The China Mail』と『中外新聞七日報』と『香港華字日報』

第一章ですすでに述べたように、『中外新聞七日報』は『The China



図版 - 六 『中外新聞七日報』 (『中国近代新聞成立史』より)

Mail』(香港英字紙、中国語名:『徳臣「西」報』)の中国語の付けページとして創刊され、陳藹亭(藹廷、一八七〇年)はその編集を担当し、そして、一八七二年四月十七日から、『中外新聞七日報』は『The China Mail』から独立し、新聞名も『香港華字日報』に変わり、陳藹亭が初代の主筆になった。

営利を目的とするのではなく、「中国人が編集し、中国人のために発言する中国語新聞」というのが陳氏の中国語新聞編集における願いであったので、『中外新聞七日報』の経済貿易に関する内容はそれほど多くはなかった。『香港華字日報』として独立してから、内容は大きく変わり、商業貿易の記事が主になったわけである。

(五) 『中外新聞七日報』の紙面構成

『中外新聞七日報』は創刊してから四カ月間に『The China Mail』の第三面を占めていたが、一八七一年八月五日以降に第七面に移された。紙面の割り付けについて、全紙面を縦で六欄に分けて、一欄九行で、一行は通算一〇五字とされ、紙面の右上に二欄を占め、右から横に「中外新聞七日報」というタイトルと旧暦の日付があり、紙面の下部に「此新聞係由香港徳臣聖地印」という出版元についての断りがある。コラムについて「本港新聞」(香港ニュース)、「中外新聞」、「選録京報及上海新報」(『京報』と『上海新報』の記事抜粋)の他に、通告と広告もある。一言で言えば、この紙面のスタイルは『香港中外新報』と非常によく似ており、ただ欄の割りは五欄と六欄の違いがある。

しかし、意味深いのは『中外新聞七日報』の創刊号、つまり一八七一年三月十一日(辛未正月二十一日)の紙面である(図版一六参照)。なぜならば、この紙面は『中外新聞七日報』がすべて占めているのではな

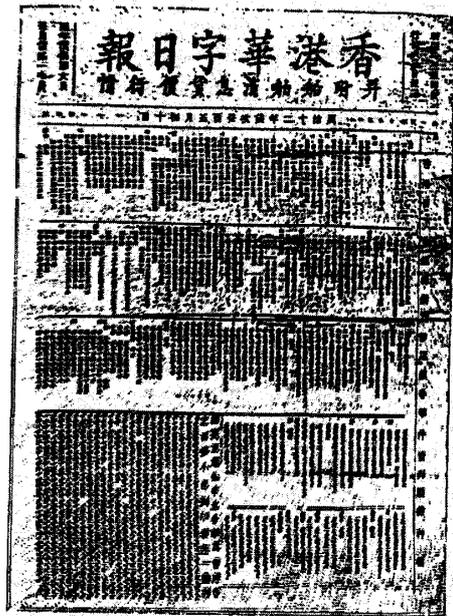
く、右から四欄が『中外新聞七日報』の内容で、左側の二欄はまだ『The China Mail』の英文の記事で、しかも両側の内容は無関係であったからである。このような中英文両国の文字が一つの紙面に併存している例は、当時の編集者がわざとやったとは思えず、最初の日だったので、中国語原稿の量の不足(中国語部分でまだ空きがある)によってできたものと推測できるが、紙面における考察にとっては、これは偶然でできた一例と言っても、次のことが伺える。初期の中国語新聞の編集者は、英字新聞の横書きのための紙面の割り付けをそのまま縦書きの中国語の記事に転用させて、それが近代型中国語新聞紙面の最初の割り付けパターンとなった。上述の『香港船頭貨價紙』の紙面も親新聞の『The Daily Press』の割り付けを参考にしたのではないかと思われる。

しかし、上述の『香港中外新報』の一面の割り付けは、英字新聞紙面によるものとは思えず、編集者が中国語の縦書きの習慣とその面に掲載しようとする記事の実際的内容にもとづいて創造したもう一つのパターンではないかと推測できよう。

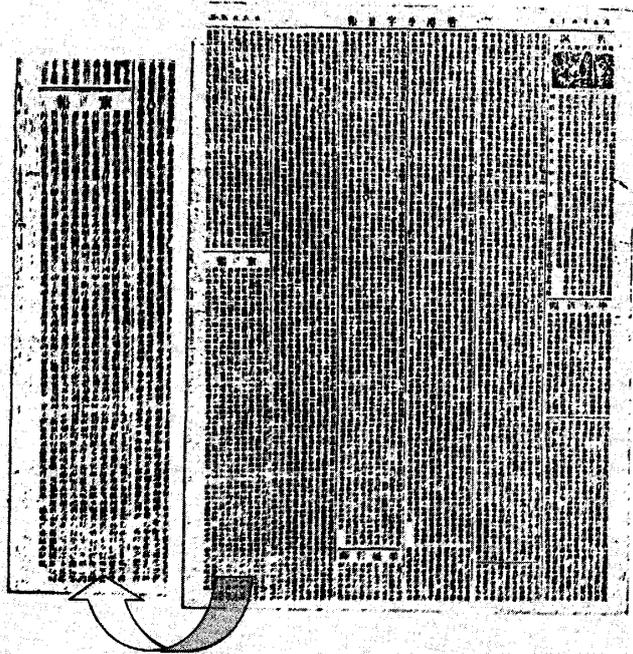
(六) 『香港華字日報』の紙面構成

『香港華字日報』の紙面(図版一七参照)と『香港中外新報』とを比較すれば、言うまでもなく割り付けとして前者は後者そっくりで、二・三・四面の欄の数は前者が『中外新聞七日報』を引き続いて六つで、後者は五つである。

しかし、注目すべきは、「破欄」という現象は、『香港華字日報』の一面にも現れており、その五つに分けている基本段下部の二段の左側が破られて、一つになっており、その記事は周辺の線に囲まれて、現代新聞の「箱もの」のようになっていいる。また、三面の左上で四つの基本欄を



判題：大綱

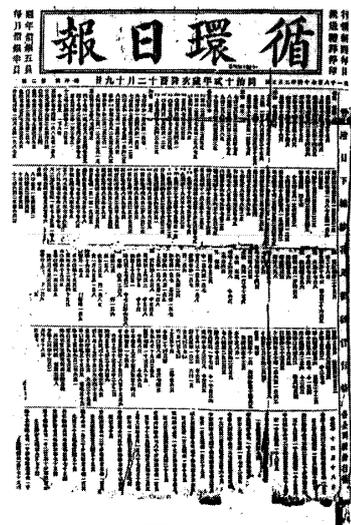
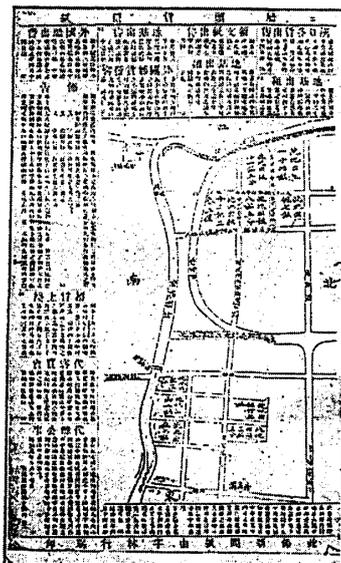


↑『香港華字日報』の「京報」部分

図版 - 七参照 『香港華字日報』(『中国近代新聞成立史』より)



図版 - 八 『上海新報』
(『中国報学史』商務版より)



大英図書館(British Library)所蔵

図版 - 九 『循環日報』
(『中国近代新聞成立史』より)

一八七〇年代前半、新しく誕生した中国語日刊紙や、日刊紙に変身する中国語紙が相次いだ。上述の『香港中外新報』と『香港華字日報』はともに一八七三年、日刊紙になっており、そして『申報』は上海で創刊間もなく一八七二年五月七日に日刊紙に改め、一八六一年に上海で創刊した『上海新報』(図版一八)も一八七二年七月二日に日刊紙に変わった。また『循環日報』

(七) 『上海新報』『循環日報』など日刊紙について

破って、それぞれ幅は二・五欄と一・五欄の「箱もの」が構成されている。また、四面上部に五つの欄を破って、かなり大きい面積の記事が、同紙面にある他の記事から突出されているように感じられる。

(図版一八)は香港で一八七四年一月五日に創刊した。

これらの新聞紙の中で、スターフ全員が中国人で創立された『循環日報』のみである。一八七三年に漢口で艾小梅によって作られた書籍型の日刊紙『昭文新報』は創刊早々廃刊になったため、これを計算に入れなければ、『循環日報』は中国人により創立され、かつ成功した最初の中国語日刊紙である。同紙は中国新聞史において重要地位を占めるが、しかし、紙面の写しを見る限り、様式と割り付けについて『香港中外新報』と『香港華字日報』とは全く同じと言ってもいいほどであるので、紙面の考察にはさほど大きな意義はないと思う。

『上海新報』は『North China Herald』(中国語名:字林西報)の中国語版で、そのとき輸入した新聞用紙で両面印刷され、紙面の大きさは大判の四分の一であったという。同紙は一八六八年二月一日に、紙面の改革を行い、紙面刷新とともに紙面を拡大して四面に増やし、一面の大きさは十八×十二インチで、タブロイド判より少し大きい。改革後の一・三・四面は広告、船期、相場そして機械の図説などで、二面はニュースや各地の新聞記事の抜粋であり、太平天国について多く報道したので、当時のこれに関する軍事情報源となり、「故凡注意戦事者、靡不人手一紙(戦争事情を注意する者は、皆手に一部を持っている)」と戈公振は述べている。⁽⁷³⁾

また、当該紙は記事の内容では四号活字を使用し、「中外新聞」などコラムのタイトルは一号活字であったが、一八七〇年三月二四日から「劉提督陣亡(戦死)」「種樹得雨(木を植えて雨を得た)」のような見出しがニュース毎に一号活字で現れており、これは中国語新聞で初めて正式にニュースに見出しを付けたものである。⁽⁷⁴⁾

図版一八は『上海新報』の壬申年九月三十日(一八七二年十月三十一

日)の一面と同日(?)の四面(?)の写しである。ニュース面ではないのでニュース見出しは見えないが、一面の新聞名「上海新報」の下に上海の代表的風景である黄浦江の絵があり、基本欄は四つで、コラムのタイトルがあり、「破欄」もある。四面(?)に機械図ではなく、一枚の地図がある。紙面の全体を見れば、落ち着いている感じで、読みやすいと思われる。

『申報』についての検証は本稿の第三節で行うことにする。

四、中国語新聞の成立期における紙面構成についてのまとめ

中国語新聞の成立期における紙面構成の流れに大きな意義をもついくつかの新聞の紙面についての考察から、次のようにまとめることができる。

宣教の目的によって作られた最初の近代型中国語新聞あるいは新聞に準じる発行物、例えば、『察世俗毎月統計傳』が中国の伝統的書籍や冊子の形を紙面構成として利用することは、その内容、発行対象とその条件にもとづいてできたものであり、決して不思議なものではない。むしろかなり合理的、自然的な過程であったと思われる。

しかし、冊子型の紙面構成といってもいかなる変化もしていなかったわけではない。当時の編集者たちは、この古い形に改造の手を伸ばして一葉を上下二つの部分に割ったり(『東西洋考毎月統計傳』の「市場價格」)、言葉別に傍線をしたり(『遐邇貫珍』)、ニュースや広告の欄を設けたり、図版やカラー地図を載せたり(『東西洋考毎月統計傳』)していた。これらは新聞に類した刊行物にみる編集意識の萌芽の跡と言えようか。何百年も続けて二〇世紀になっても模様もあまり変わらない『京

報』の紙面と比べると、かなり進歩していたと感じられる。

このような冊子の形と紙面構成は長期的に中国語新聞ないし中国のマスコミ界にかなり大きな影響を及ぼしたのは事実であり、成立期だけではなく、発展期になってもいくつかの刊行物、例えば『時務報』『清議報』『民報』など中国の近代史に影響を与えていた「報」は皆冊子型であった。

この形を一挙に突破したきっかけは、やはり純粹に経済を目的とした情報紙を作ろうとしたことであった。つまり『香港船頭貨價紙』のような新聞は、英字の親新聞の紙面の割り付けをそのまま利用する一方、貿易をはじめとする経済情報など、より大量の情報は一気に一目瞭然で読者に読ませるべきで、何百字しか入れられない冊子の頁ではすでに時代遅れで何千字を綴じ込める紙面が欲しがられており、ここに西洋の近代型紙面を導入したのは当時においてほぼ唯一の選択ではなかったと思われる。

また、成立期の近代型中国語新聞の紙面が非常に幼稚だとは思いますが、捨て切れないのは、当時の編集者は西洋新聞紙面の割り付けをそのまま利用していたわけではなく、「破欄」、絵と図を入れ、見出しを付けるなど現代に至っても使われている編集手段も、糸口がそのときすでに見えていたからである。とりわけ、『香港中外新報』の一面を初めとして、後に『香港華字日報』も採用したことがある、紙面の基本欄(段)を横に割るといふ漢字を縦書きにする習慣にふさわしい割り付けの型は、粗略には見えるが、やはり中国語新聞の発展史上一つの重要な創造で、現在の縦書き型の漢字系新聞紙面の割り付けの前身と言えよう。

しかし、『中外新聞七日報』『香港中外新報』『香港華字日報』の紙面で、一つのコラムに行の字数が多すぎることや、一つの新報でも「繫日

条事、不立首末(日を繋ぎて事を条べ、首末を立てず)」「(本稿第一節一の(二)、所謂「開元雜報」を参照)のような読みにくい紙面とより読みやすい紙面が共存していたことを考えれば、読者のために紙面をより読みやすくするという意識はまだ非常に薄かったわけで、わずかに編集の腕と見られるところも、ほとんど無意識的にやっていたということもまた認めなければならぬと思われる。

(続く)

注

本稿の分量は紀要の掲載基準を大幅に超えたが、田村・和田両先生をはじめ、編集・審査の方々による特別のご配慮で掲載することができ、誠に感謝しております。また、東京経済大学経営学部の池津さやかさんにネイティブチェックをしていただいたことに感謝の意を表す。

- (1) 『中国新聞史的分期与起点』、『新聞研究資料』・総八 一八四頁
- (2) 拙稿『中国の最古の印刷新聞「題奏事件」について』の関する部分を加筆して構成。
- (3) 『中国報学史』・商務版第二章三頁
- (4) 『談邸報』・『新聞業務』(一九五六年第七期)
- (5) 『從不列顛圖書館藏唐煇義軍「進奏院狀」看中国古代的報刊』、『新聞學論集』・第五輯・一九八三年一一七頁
- (6) 『中国古代報紙探源』参照
- (7) 『中国報学史』・商務版第二章二頁
- (8) 同前
- (9) 『中国新聞事業通史』・第一卷「三十一—三十三頁参照。
- (10) 『中国古代報紙探源』参照
- (11) 『有関邸報幾個問題的探索』参照
- (12) 『中国新聞事業通史』・第一卷「三十四—六十三頁参照。
- (13) 陸樹声『長水日鈔』卷一
- (14) 『中国報学史』・商務版第二章五頁
- (15) 『金瓶梅詞話』第十七回、第七十七回参照。
- (16) 『紅樓夢』第九十九回参照

- (17) 『中国新聞事業通史・第一巻』七十七頁。訳文は筆者。
 (18) 訳文は『中国報紙(新聞)史研究(Ⅱ)』による。
 (19) 『中国彫刻源流考』(一九一八年)二頁。訳文は『中国報紙(新聞)史研究(Ⅱ)』。
 (20) 『新聞学論集』第九輯二二五頁・『新聞研究資料・総九』一一四頁
 (21) 『中国新聞事業通史・第一巻』五十三―六十頁参照。
 (22) 『中国報紙(新聞)史研究(Ⅱ)』による。
 (23) 拙稿『中国の新聞紙面研究についての考察(上)』七三頁参照
 (24) 『新聞研究資料・総九』一一二頁・『新聞学論集』第五輯 一一〇頁
 (25) 『マス・コミュニケーション』四三号 一一七―一二二頁(日本マス・コミュニケーション学会「一九九三年」)
 (26) 本稿(おこづ)、中西暦の換算はASCC(中央研究院計算中心・中国台湾)のHPに
 44 (http://www.sinica.edu.tw/~idbroj/sinocal/usochtml)。
 (27) 『中国明代新聞傳播史』による
 (28) 『中国新聞史(古近代部分)』五七頁
 (29) 『新聞研究資料・総九』一〇七頁
 (30) 『中国報学史』商務版第二章十三頁
 (31) 『新聞研究資料・総九』一〇七頁
 (32) 『中国的報刊』一九頁
 (33) 『中国新聞事業通史・第一巻』二〇六―二〇七頁参照
 (34) 乾隆三十八年七月初五の『題奏事件』に大臣四人が大学士劉綸死去を報告する「奏本」が掲載され、翌初六に大学士劉綸死去を追悼する「上諭」が載せられた。三日後の初九に、劉綸の「遺疏(死亡した大臣の皇帝への遺書)」を載せるとき、その後ろに初六の「上諭」が再度掲載された。紙面での位置は初六の一葉目から二葉目に移ったが、初六のと同じ活字を使っていたようである。つまり、初六に拾った活字のこの部分は、使用後ばらばらにせず、初九の日にもう一度使用したのである。
- (35) 『中国報紙(新聞)史(Ⅱ)』による
 (36) 『中国古代表紙探源』参照
 (37) 同上 一六四―一六六頁参照
 (38) 同上 一六六頁参照
 (39) 同上
 (40) 同上 一六五頁
 (41) 『中国古代表紙探源』第一五二頁参照
 (42) 同上 一五二頁
 (43) 『中国近代新聞成立史』一三一頁

- (44) 同上四六―四七頁参照
 (45) 同上五〇頁参照
 (46) 訳文は『新訳漢文大系一 論語』一六三頁による。
 (47) この点について卓南生は『中国近代新聞成立史』(五三頁の注四六)で、これはブ
 リトンが指摘したと説明した。また王鳳超の『中国的報刊』(二七頁)ではこの説に
 従っている。
 (48) 『中国近代報刊名録』三五五頁で「五葉十頁」と記している。
 (49) 『中国近代新聞成立史』五一頁
 (50) 同上五〇頁表一、表二参照
 (51) 同上五六頁注(三) 参照
 (52) 同上十一頁
 (53) 同上五六頁参照
 (54) 同上五九頁
 (55) 訳文は『新訳漢文大系一 論語』二五一頁による
 (56) 『中国近代報刊名録』二八五頁
 (57) 『海外華文報刊の歴史と現状』二九頁
 (58) 『中国報学史』商務版第三章四頁
 (59) 『中国近代報刊名録』一一〇頁
 (60) 『中国近代新聞成立史』六四頁、『中国近代報刊名録』一一〇頁
 (61) 訳文は『新訳漢文大系一 論語』三四〇頁による
 (62) 『中国報学史』三聯版三七四頁、『中国近代報刊名録』一一〇頁
 (63) 『中国近代報刊名録』一一六頁
 (64) 『中国近代新聞成立史』六八頁
 (65) 『中国近代報刊名録』一六五頁
 (66) 同上二七頁
 (67) 同上三四頁
 (68) 『中国近代新聞成立史』一〇一頁
 (69) 『中国近代報刊名録』三三四頁
 (70) 同上 一五七頁
 (71) 『中国近代報刊名録』七九頁
 (72) 写して読めないが、卓南生氏が筆者に話した内容による(一九九二年十二月三日東
 京大学にて)。
 (73) 『中国報学史』商務版第三章十二頁
 (74) 『中国的報刊』四三頁

参考文献

中国語文献

- 戈公振 『中国報学史』(商務印書館・上海・民国十六年〔一九二七年])
- 同 『中国報学史』(三聯書店・北京・一九五五年)
- 徐宝璜 『新聞學綱要』(上海聯合書店・上海・一九三〇年)
- 任白濤 『應用新聞學』(垂東圖書館・上海・一九二八年)
- 周孝庵 『最新實驗新聞學』(上海時事新報社・上海・民国十九年〔一九三〇年〕再版)
- 黃天鵬 『中国新聞事業』(上海聯合書店・上海・一九三〇年)
- 同 『新聞學刊』(光華書局・上海・一九三〇年)
- 天廬主人(黃天鵬) 『天廬談報』(光華書局・上海・一九三〇年)
- 管翼賢纂修 『新聞學集成』(中華新聞學院・北京・一九三二年)
- 方漢奇等 『中国近代報刊史』(山西人民出版社・太原・一九八一年)
- 方漢奇主編 『中国新聞事業通史・第一卷』(中国人民大学出版社・北京・一九八三年)
- 黃卓明 『中国近代報紙探源』(人民日報出版社・北京・一九八三年)
- 中国人民大学新聞系編 『中国近代報刊史參考資料 上・下』(校內用書・一九八二年)
- 復旦大學新聞系新聞紙教研室 『簡明中國新聞史』(福建人民出版社・福州・一九八六年)
- 王洪祥主編 『中国新聞史(古近代部分)』(四所大學合編・中央民族學院出版社・北京・一九八八年)
- 賴光臨 『中国近代報刊史』(台灣商務印書館・台北・民國六十九年〔一九八〇年〕)
- 曾虛白 『中国新聞史』(三民書店・台北・民國七十三年版〔一九八四年〕)
- 朱傳譽 『先秦唐宋明清傳播事業論集』(台灣商務印書館・台北・民國七十七年〔一九八八年〕)
- 同 『中国新聞事業研究論集』(台灣商務印書館・台北・民國七十七年〔一九八八年〕)
- 同 『宋代新聞史』(中國學術著作獎勵委員會・台灣商務出版社・台北・中華民國五六年〔一九六七年〕)
- 同 『報人・報史・報學』(台灣商務印書館・台北・民國六十年〔一九七一年〕三版)
- 方積根等 『海外華文報刊的歷史與現狀』(新華出版社・北京・一九八八年)
- 鄭貞銘 『新聞採訪與編輯』(三民書店・台北・民國七十九年〔一九九〇年〕)
- 王鳳超 『中国的報刊』(人民出版社・北京・一九八八年)
- 史和・姚福申等 『中国近代報刊名錄』(福建人民出版社・福州・一九九一年)
- 尹韻公 『中国明代新聞傳播史』(重慶出版社・重慶・一九九〇年)
- 張召奎 『中国出版史概要』(山西人民出版社・太原・一九八五年)

中国語新聞の紙面編集の史的考察(上)

馬 挺

- 徐鑄成 『報海旧聞』(上海人民出版社・上海・一九八一年)
- 方漢奇 『中国封建社會言論出版禁令考』(同上誌・第一輯・一九八〇年)
- 同 『辛亥革命時期報刊業務工作的改進』(同上誌・第二輯・一九八一年)
- 同 『從不列顛圖書館藏唐屠義軍「進奏院狀」看中国古代的報刊』(同上誌・第五輯・一九八三年)

- 同 『讀《開元雜報考》一文後的斷想』(同上誌・第九輯・一九八五年)
- 姚福申 『開元雜報考』(同上誌・第九輯・一九八五年)
- 王鳳超 『中国新聞業史的分期與起點』(『新聞研究資料』總八輯・中國社會科學院新聞研究所同誌編輯部編輯・新華出版社・北京・一九八一年)

- 姚福申 『有閩邸報幾個問題的探索』(同上誌・總九輯・新華出版社・一九八一年)
- 潘賢模 『南洋萌芽時期點報紙——近代中國報史初篇』(同上誌・總九輯・新華出版社・一九八一年)
- 尹韻公 『略論《方曆邸鈔》』(同上誌・總四五輯・一九八九年)
- 卓南生 『《香港華字日報》創刊日期考——訂正戈公振一八六四創刊之說』(同上誌・總四十三輯・中國社會科學出版社・一九八八年)

- 李斯頤 『外報对中国近代報刊的影響』(『新聞學刊』總第七期・中國新聞學會連合會/中國社會科學新聞研究所・北京・一九八六年)
- 王甫 『報紙版面中的形及相互關係』(同上誌・總第九期・一九八六年)

- 潘掌榮 『論報紙版面形式』(同上誌・一九八七年四號)
- 楊伯峻 『春秋左傳注』(中華書局・北京・一九八一年)
- 孫玉華 杜文鐸主編 『簡明中國近代史』(福建人民出版社・一九八六年)

- 『清史編年』(第六卷(乾隆朝)下・第十卷(同治朝)) (中国人民大学出版社・北京・二〇〇〇年)
- 『題奏事件』(公慎堂・乾隆三六年六月二十四日〔一七七一年八月五日〕) (乾隆四一年六月一日〔一七七六年七月二十三日〕) 間の約六十一日分/嘉慶六年八月三十日〔一八〇一年一〇月七日〕) (同年十月六日〔十一月十一日〕) 間の約六日分・日本国立国会図書館所蔵)

- 『申報』復印版(上海書店・上海・一九八二年・日本国立国会図書館所蔵)
- 『紅樓夢』(人民文學出版社・北京・一九五七年)
- 『金瓶梅詞話』(光華書店・香港)

日本語文献

- 小野秀雄 『内外新聞史』(日本新聞協會・一九六一年)
- 同 『翻刻新聞雜誌の原書について』(『新聞學評論』I・一九五二年)

- 同 『我国初期の新聞と其文献について』(『明治文化全集・第四卷・新聞篇・昭和三年改版・明治文化研究会編輯・日本評論新社発行』)
- 鈴木秀三郎 『本邦新聞の起原』(ペリかん社・昭和六十二年「一九八七年」)
- 内川芳美 『新聞史話——生態と興亡』(社会思想社・昭和四十三年「一九六八年」新装版)
- 卓南生 『中国近代新聞成立史』(ペリかん社・一九九〇年)
- 同 『官板華字新聞および中国語原紙について』(『日本初期新聞全集』ペリかん社一九八六年)
- 同 『解題』『遐邇貫珍』『六合叢談』『中外新報』『中外襍誌』『香港新聞』(同上)
- 小糸忠吾 『ニュースの源流——中国の新聞千二百年』(教育社・一九八五年)
- 三好崇一 『中国の新聞の特色』(上智大学『コミュニケーション研究』十四号・一九八四年)
- 春原昭彦 『『邸報』について方漢奇教授に聞く』(同上誌 十八号・一九八八年)
- 足立利雄・三沢玲爾 『中国報紙(新聞)史研究(Ⅰ)』(『関西大学社会学部紀要』第十三卷 第一号 昭和五六年「一九八一年」)
- 同 『中国報紙(新聞)史研究(Ⅱ)』(同上誌・第十五卷 第一号 昭和五八年「一九八三年」)
- 入江啓四郎 『中国報紙研究法(支那新聞の読み方)』(株)タイムス出版社・昭和十年)
- 杉村楚人冠 『最近新聞紙学』(中央大学出版部・一九七〇年)
- 島崎憲一 『現代新聞の原理』(弘文堂・昭和四三年「一九六八年」)
- 一力一夫 『実践新聞論——東京大学新聞研究所講義録』(河北新報社・昭和五九年「一九七四年」)
- 伊達宗義編 『中国近・現代史略年表(アヘン戦争から文化大革命まで)』(拓殖大学海外事情研究所・井草出版 平成元年「一九八九年」)
- J・A・レント(John A. Lent) 編著 『アジアの新聞』(原書『The Asian Newspapers: Reluctant Revolution』小松原久夫等編訳 東出版株式会社 一九七二年)
- 総合ジャーナリズム研究所編 『マスコミ文献集大成』(社団法人東京社・昭和四九年「一九七四年」)
- 吉田賢抗 『新釈漢文大系一 論語』(明治書院・昭和三十五年「一九六〇年」)
- 拙稿 『中国の最古の印刷新聞「題奏事件」について』『マス・コミュニケーション』四三号 一一七—一二一頁(日本マス・コミュニケーション学会「一九九三年」)
- 同 『中国の新聞紙面研究についての考察(上)』『明星大学研究紀要』第十号(二〇〇二年)
- 同 『中国の新聞紙面研究についての考察(下)』『明星大学研究紀要』十一号(二〇〇三年)

年)